月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.135



あの名曲の数々がCDで蘇る！
オリジナルサウンドトラック
『那由多の軌跡 アド・アストラ』レビュー

3つの運命が繋がり
ついに解放作戦がスタートする
創の軌跡 THE MISERABLE SINNERS

エステルは試練を乗り越えた仲間たちとともに
頂上へと駆け登る
英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

マリアベルの衣装替えが登場！
『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

クロスベルのゆる～い日常を満喫しよう！
英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

ヴァンたちの新たなイラストが到着！
『英雄伝説 黎の軌跡II －CRIMSON SiN－』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

「ま、さしずめ報酬ゼロの依頼（4spg）ってところか。
せめてご褒美スイーツくらいは用意するかね。」



ヴァン・アークライド

（CV：小野大輔）　*Van Arkride*

年齢：25 歳
武器：撃剣（スタンキャリバー）

首都イーディスで《アークライド解決事務所》の所長を務める青年で、自他共に認めるスイーツ＆サウナ＆導力車好き。
《裏解決屋（スプリガン）》として警察や遊撃士とは異なる“グレー”な依頼をこなしているが、きっちり筋は通すという彼なりの流儀を重んじており、仕事柄“表”“裏”どちらにも顔が広い。
アニエスの依頼で８つの原型導力器《オクト=ゲネシス》を探す中、ヴァン専用戦術オーブメントに搭載されたホロウコア《メア》を通じて黎き異形の姿《魔装鬼（グレンデル）》へと変身し各地でマフィア組織《アルマータ》との戦いを繰り広げた。
《オクト=ゲネシス》を巡る争いで共和国全土を恐怖に陥れた《アルマータ》が壊滅したことで、事務所メンバーも一時解散することに。
すっかり寂しくなった事務所で一人気ままにハードボイルドな日々（本人談）を過ごしているらしい。







ヴァンほか
新たなキャラクター
イラストが到着！



THE LEGEND OF HEROES
黎の軌跡 II
CRIMSON SiN
クロノキセキⅡ－クリムゾン・シン－

タイトル：英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN-
発売日：2022 年秋
ジャンル：ストーリー RPG
対応機種：PlayStation5 / PlayStation4
プレイ人数：1人
販売価格：未定
CERO レーティング：審査予定

カルバード共和国を舞台とした『軌跡』シリーズ『黎の軌跡』の第２作『黎の軌跡Ⅱ』の続報がついに到着！今回は主人公・ヴァンをはじめとする主要キャラクター３名の『黎Ⅱ』版新規イラストが明らかとなった！

アニエス・クローデル

（CV：伊藤美来）　*Agnès Claudel*

年齢：16歳
武器: 導力杖(オーバルスタッフ)



「どうか頼ってください――
私だって、《裏解決屋》の一員なんですから！」

首都の名門校《アラミス高等学校》で生徒会・庶務を担当している高校１年生。
丁寧な言葉遣いと清楚で柔和な雰囲気が特徴的な少女だが、《裏解決屋》としてのグレーな仕事や社会の“闇”を前にしても決して染まることのない強い意志を宿している。
曾祖父の遺産である８つの原型導力器《オクト＝ゲネシス》を探す過程でヴァンと出会い、助手として解決事務所でバイトをしながら遺産探しを続けることになった。
《ゲネシス》が７つ揃った現在は、学藝祭の準備に追われながらも定期的に解決事務所を手伝いつつ、最後の１つを探し続けている。
ヴァンに対しては所長として尊敬しているだけでなく、特別な想いも抱いているようだが……。

エレイン・オークレール

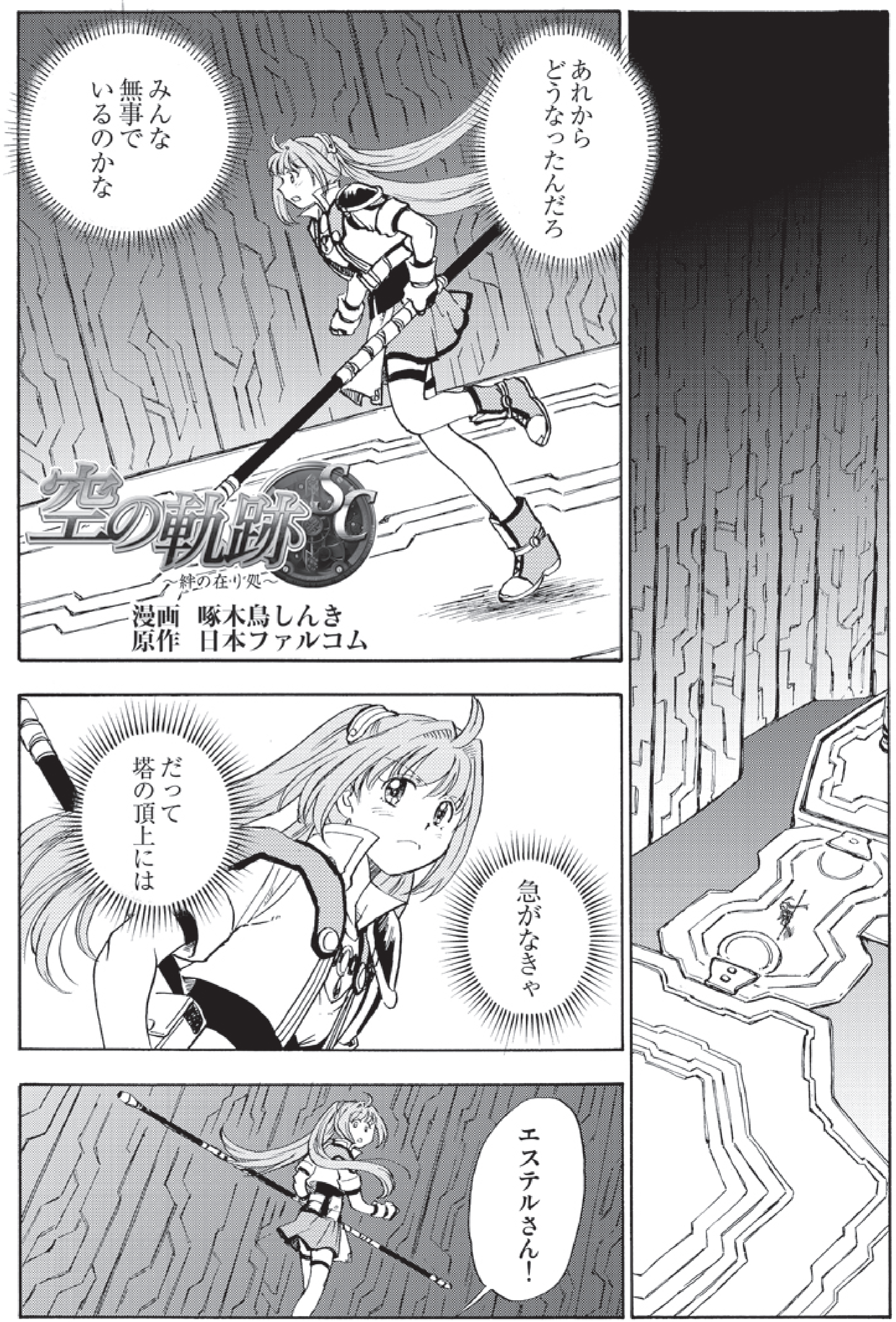
（CV：斎藤千和）　*Elaine Auclair*

年齢：24歳
武器: 騎士剣



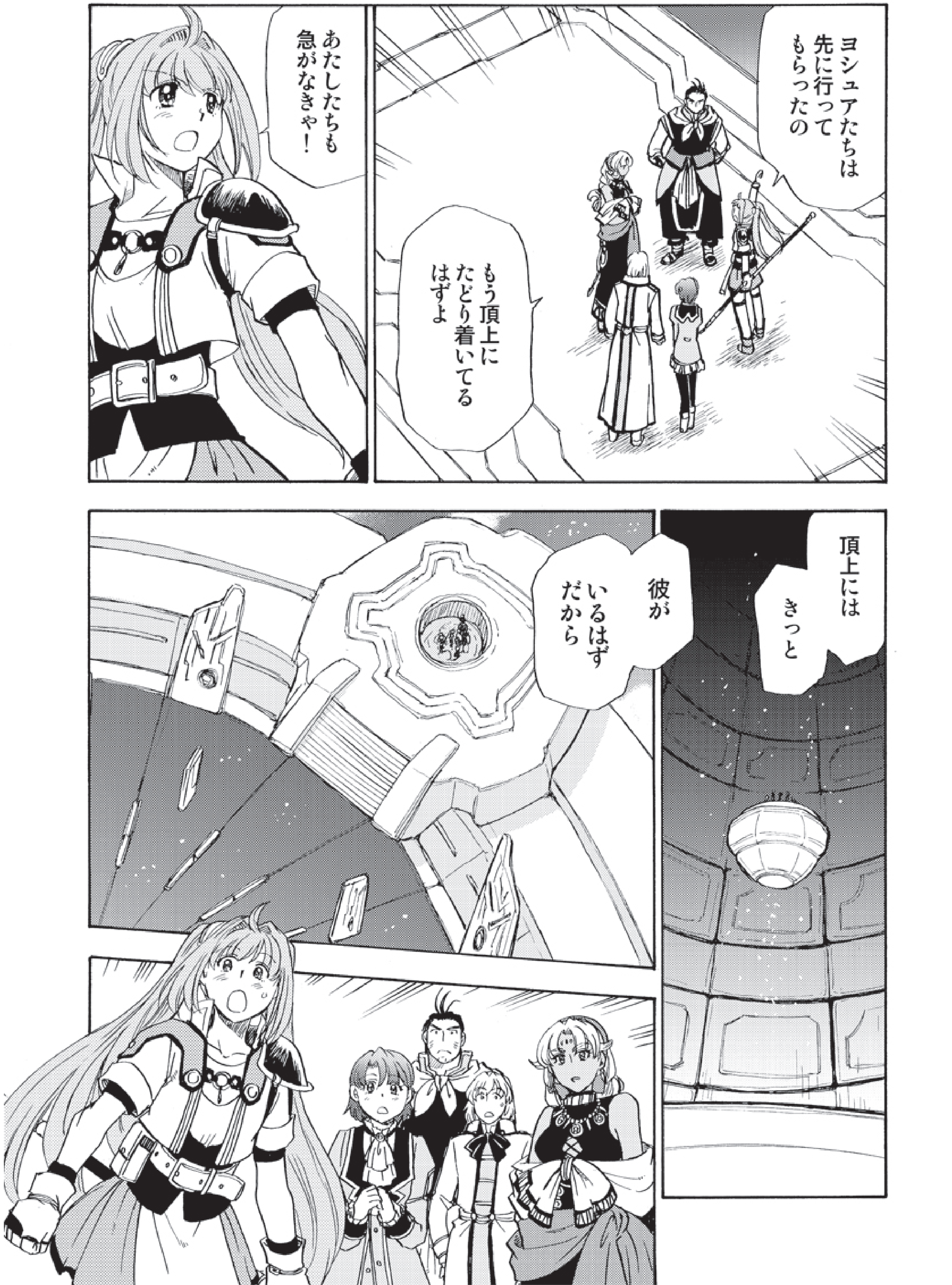
「〝貸し逃げ〟なんか二度とさせない――
覚悟しておくことね、ヴァン。」

《剣の乙女（ソードメイデン）》の渾名でエースとして活躍するカルバード共和国のＡ級遊撃士。
達人級の剣術の腕前と凛とした美貌を併せ持つことからメディアの注目の的となっているが、遊撃士協会の広告塔としての取材を除き、写真集や女優といった他業界からのオファーはすべて断っている。
学生時代、恋人として短い青春時代を共に過ごし、ある日何の前触れもなく失踪してしまった幼馴染・ヴァンとは７年の歳月を経て再会。
互いに過去のわだかまりを抱えたまま、ギクシャクした関係を続けていたが、《アルマータ》との戦いの中で少しずつ歩み寄っていけるようになった。
――そんな中、
首都の片隅でＣＩＤ（中央情報省）γ中隊が何者かに惨殺されたこと、そして、現場には“紅黎い”異形の怪物の姿があったという報せがエレインのもとに届くのだが……。

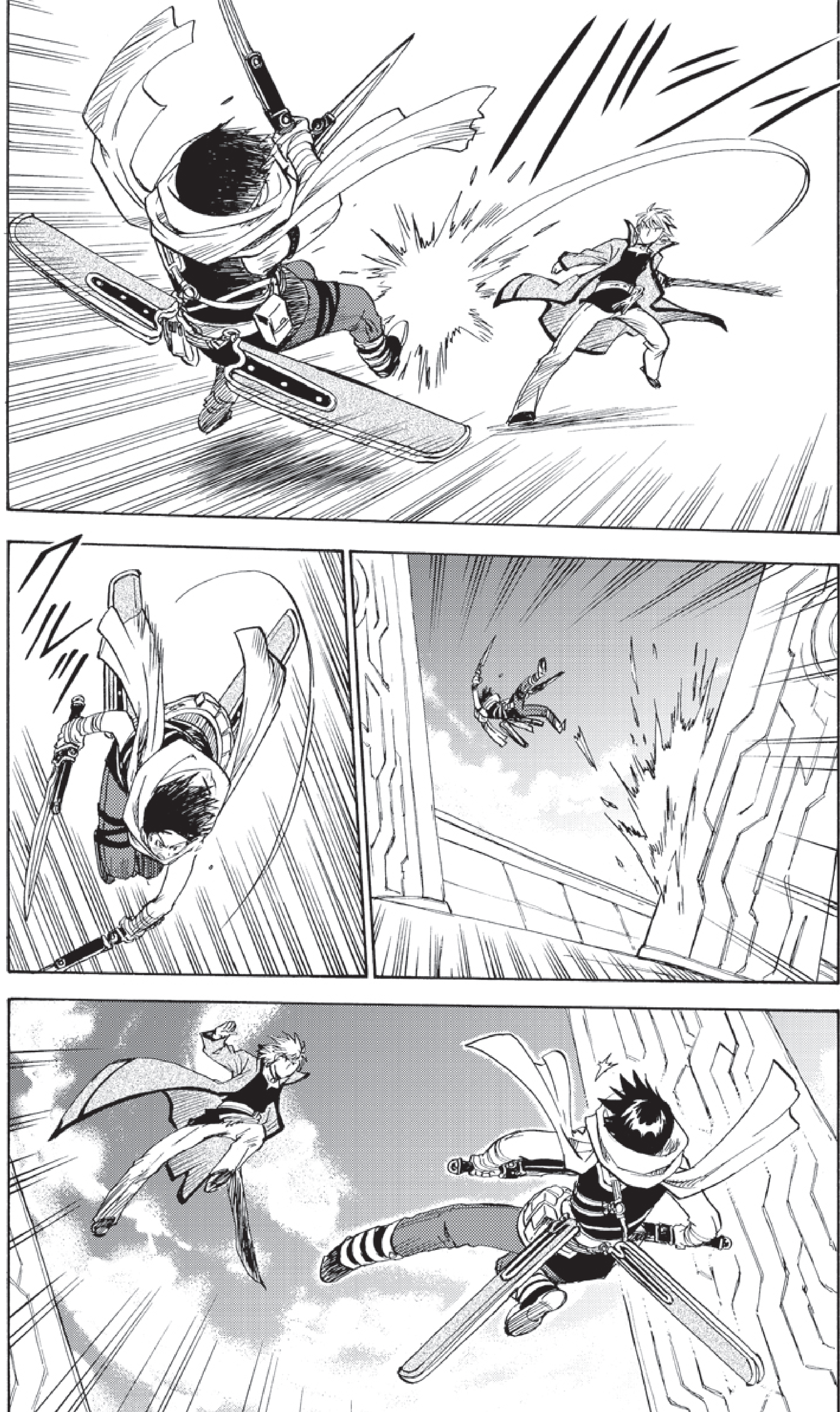

あれから
どうなったんだろ
みんな
無事で
いるのかな
空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
だって
塔の頂上には
急がなきゃ
エステルさん！

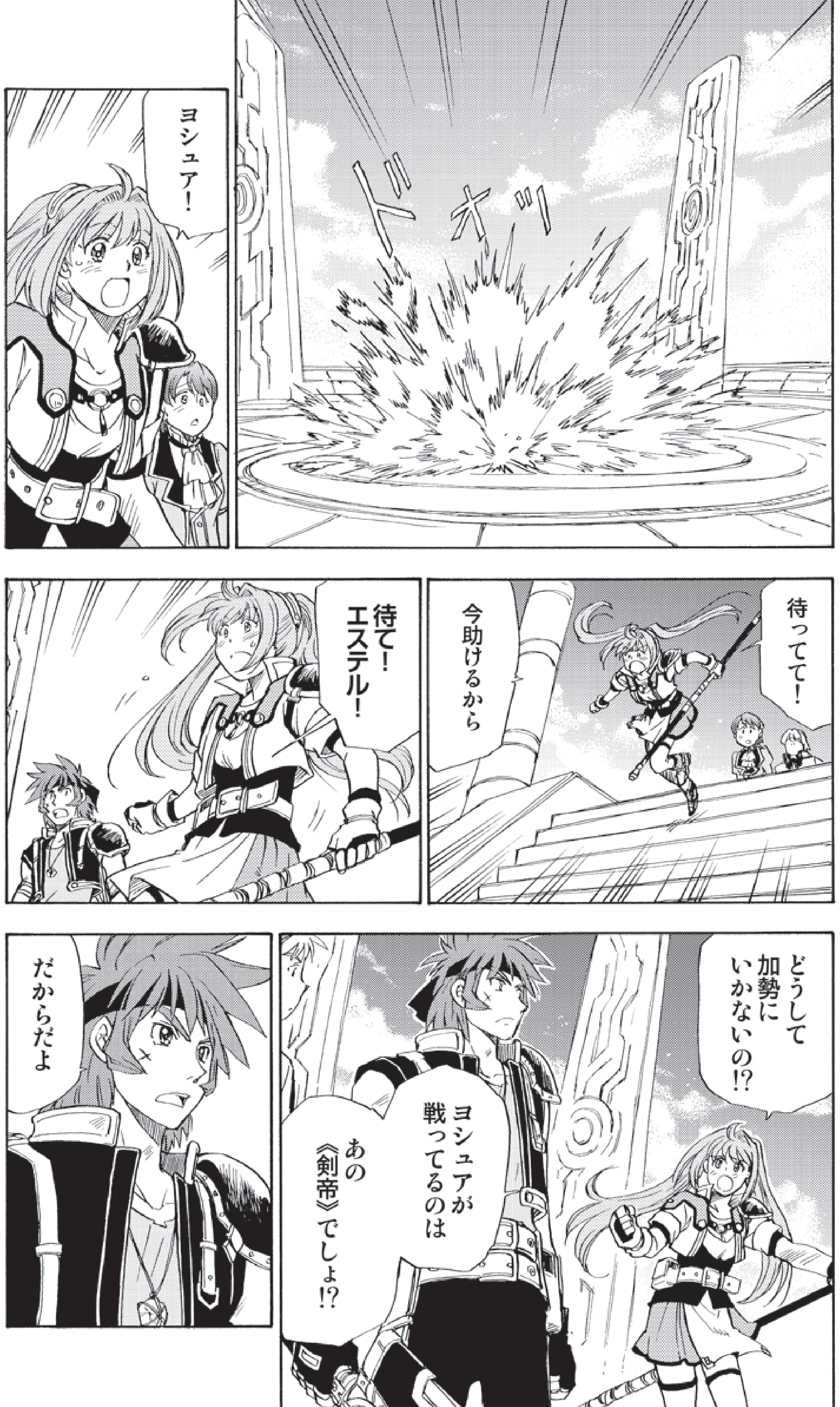

クローゼ！オリビエ！
よかった
ブルブランは…どうしたの？
愛と希望の偉大さをここぞとばかりに説いて差し上げてきたよ
なんとか…わかっていただけたみたいです
そっか！
遅くなってすまん！
ジンさん！
任された端末は動かせたと思うんだが…上手くいったか？
…ってことは
ヴァルターのやつもしばらく目を覚まさんだろうし
放っておいてもかまわんだろう

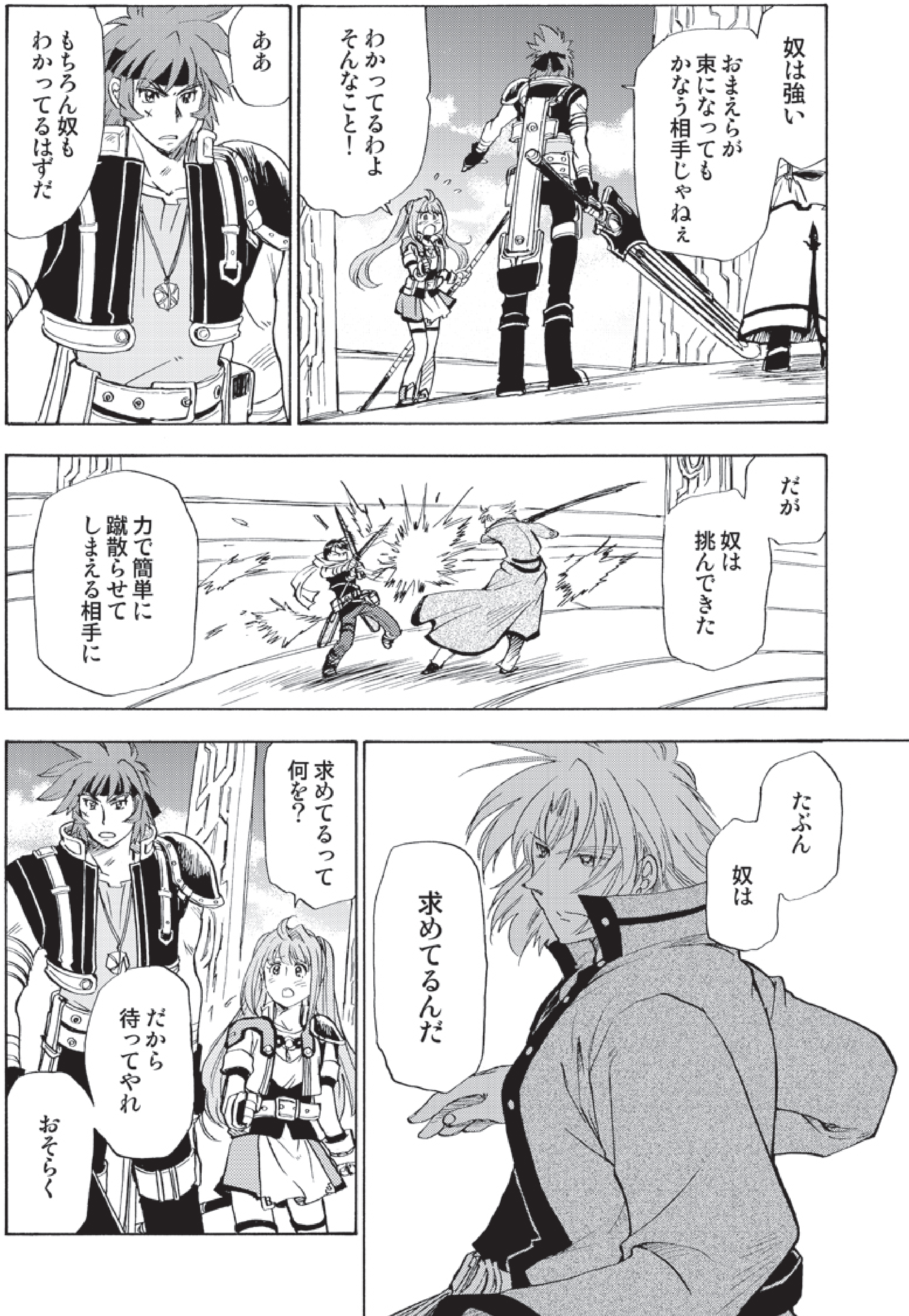

みんな待たせたわね
こっちの作業も完了したわよ
シェラ姉
ルシオラお姉ちゃんは
大丈夫
きっとまた会えるわ
とにかく今は先に進みましょう
頂上へのゲートロックは解除できてるの？
アガットやヨシュアが
いないようだけど

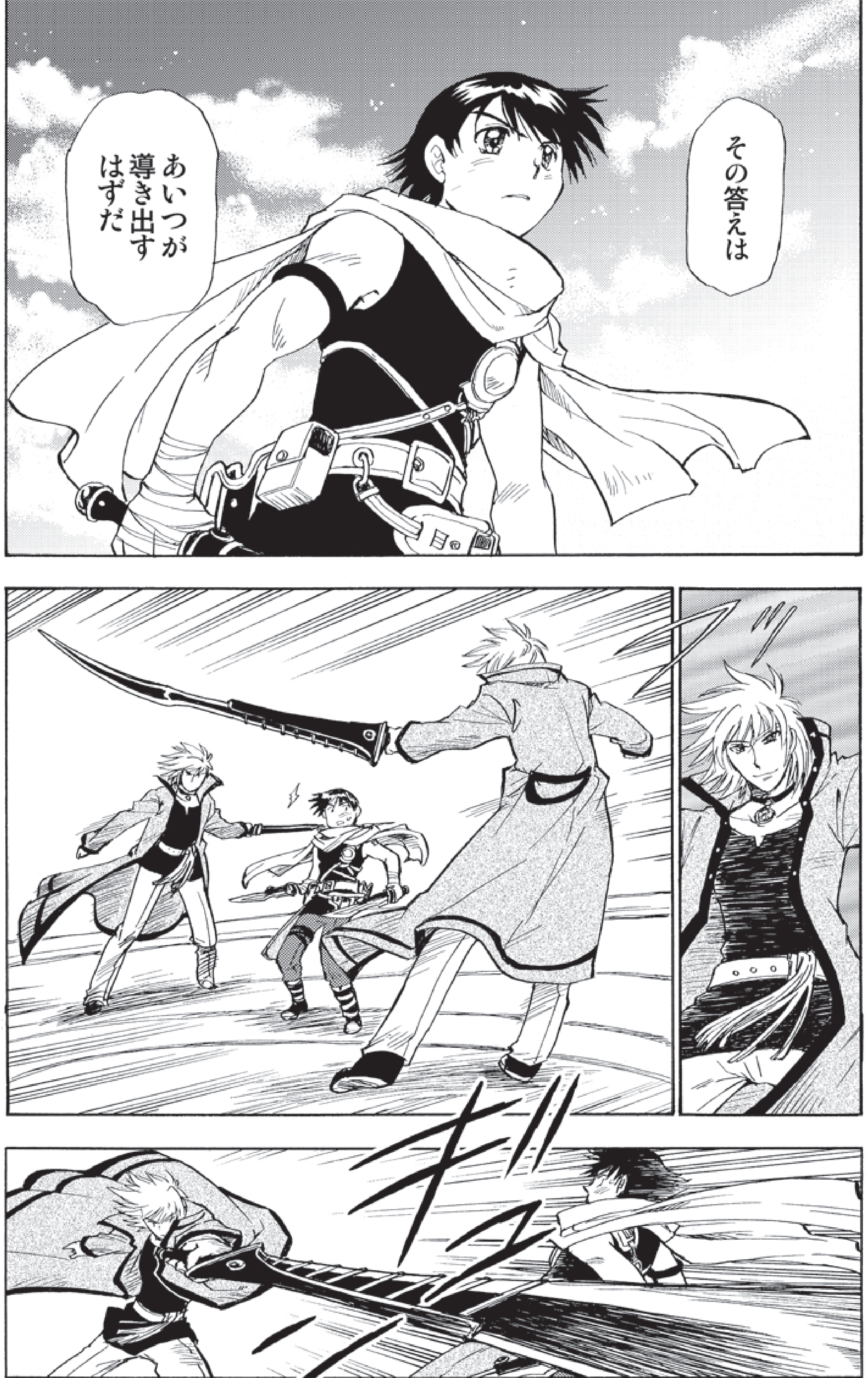

ヨシュアたちは先に行ってもらったの
もう頂上にたどり着いてるはずよ
あたしたちも急がなきゃ！
頂上にはきっと
彼がいるはずだから






ドオッ
ヨシュア！
待ってて！
今助けるから
待て！エステル！
どうして加勢にいかないの!?
ヨシュアが戦ってるのはあの《剣帝》でしょ!?
だからだよ


奴は強い
おまえらが束になってもかなう相手じゃねぇ
わかってるわよそんなこと！
ああ
もちろん奴もわかってるはずだ
だが
奴は挑んできた
力で簡単に蹴散らせてしまえる相手に
たぶん
奴は
求めてるんだ
求めてるって何を？
だから待ってやれ
おそらく


その答えは
あいつが導き出すはずだ

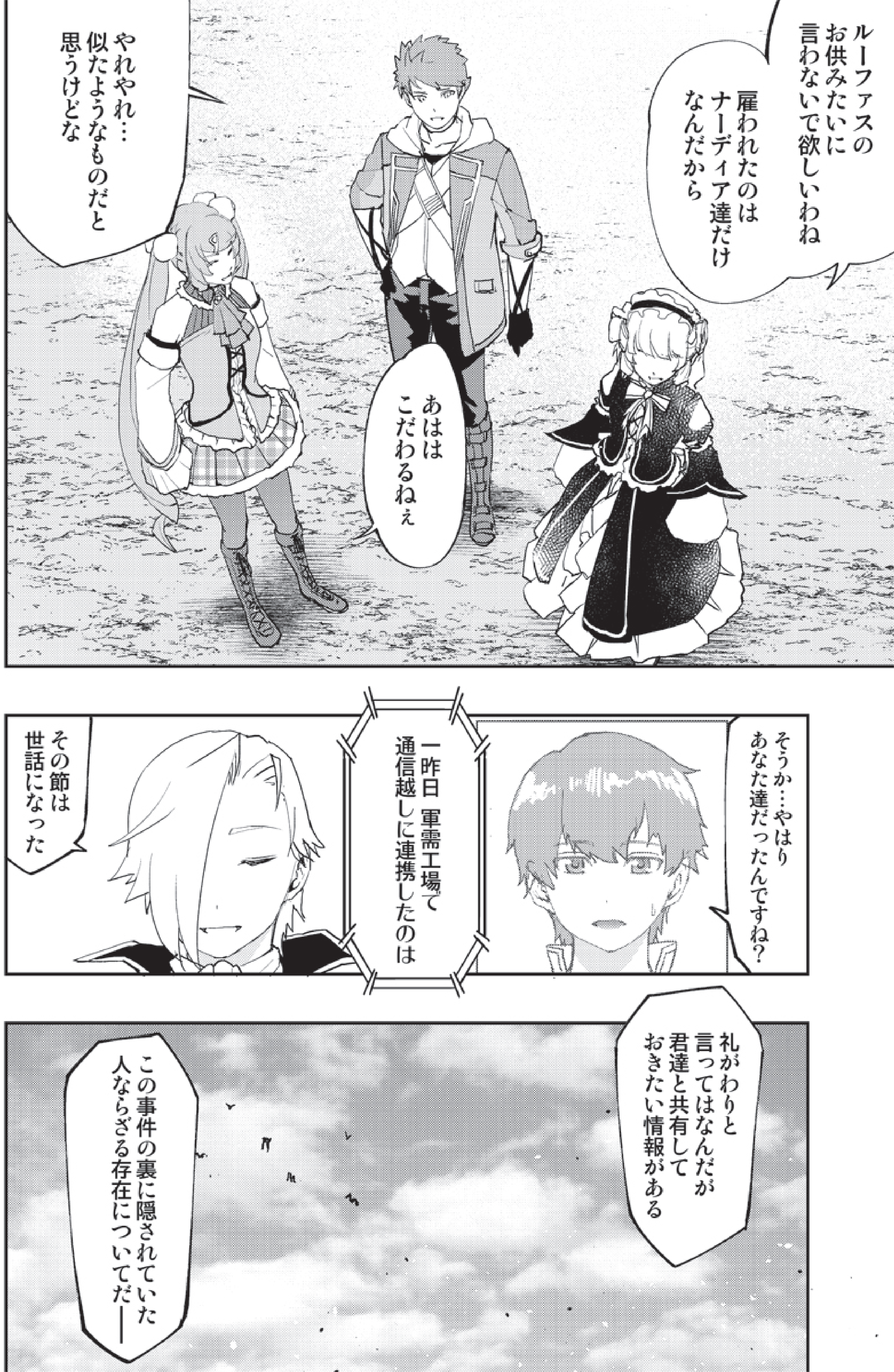

どうした
ヨシュア
唯一勝る
スピードを
活かさずに
どうやって
勝機をつかむ
つもりだ

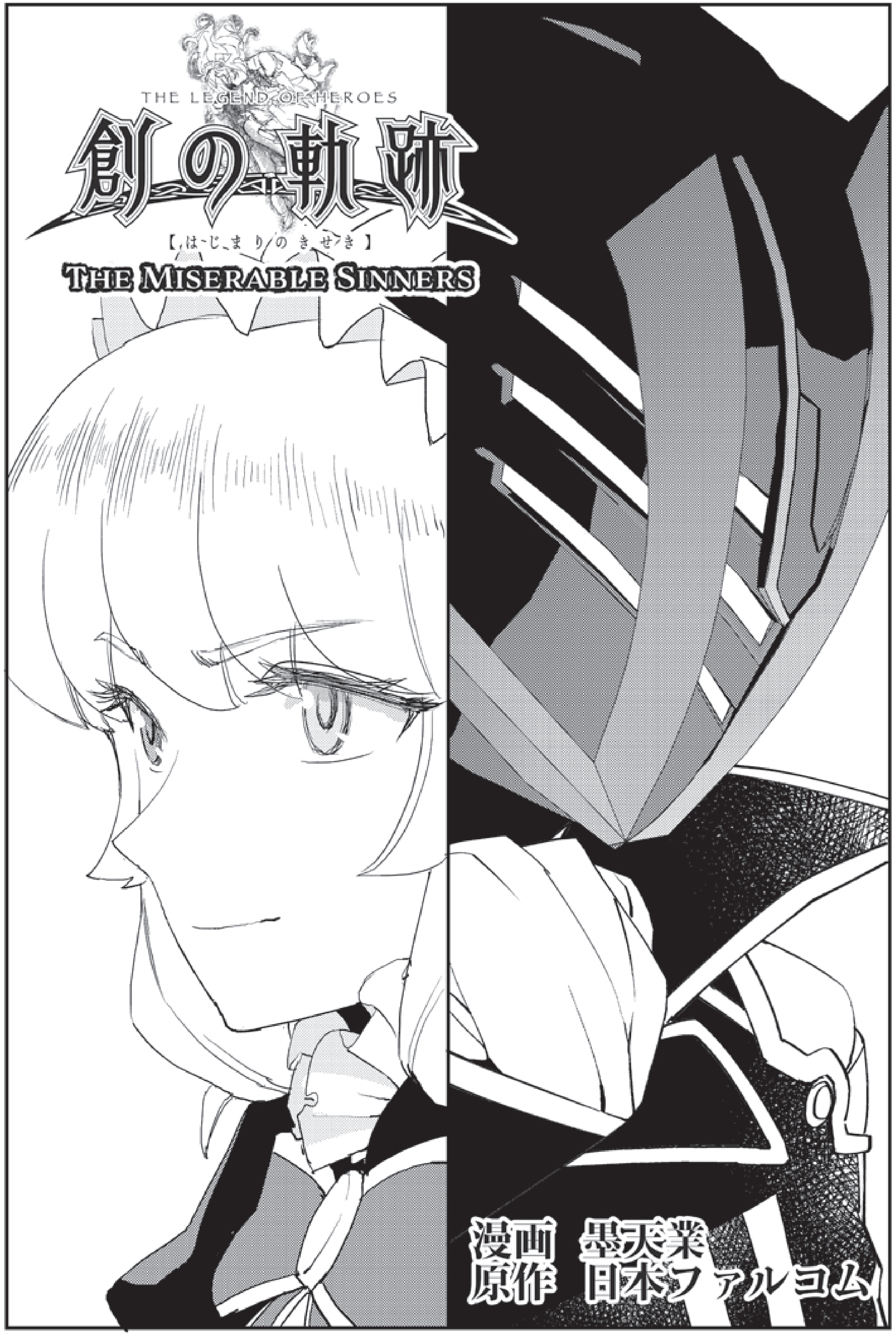

…ねぇ
レーヴェ
ひとつだけ
答えて
欲しいんだ
次回に続く





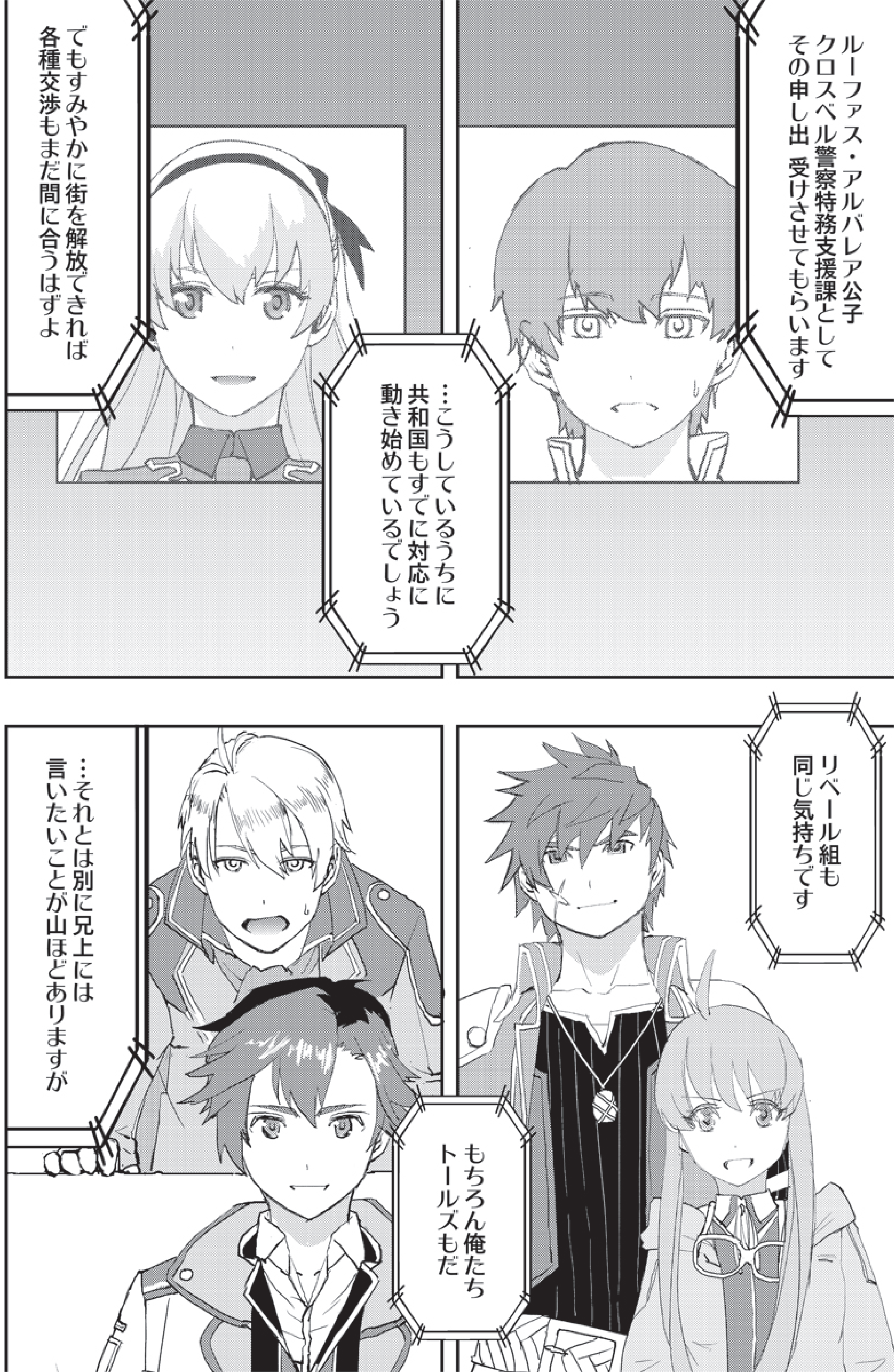
定価：1000円（本体909円+税） ISBN 978-4-8021-3294-7
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル


ルーファスのお供みたいに言わないで欲しいわね
雇われたのはナーディア達だけなんだから
やれやれ…似たようなものだと思うけどな
あははこだわるねぇ
そうか…やはりあなた達だったんですね?
一昨日 軍需工場で通信越しに連携したのは
その節は世話になった
礼がわりと言ってはなんだが君達と共有しておきたい情報がある
この事件の裏に隠されていた人ならざる存在についてだ——

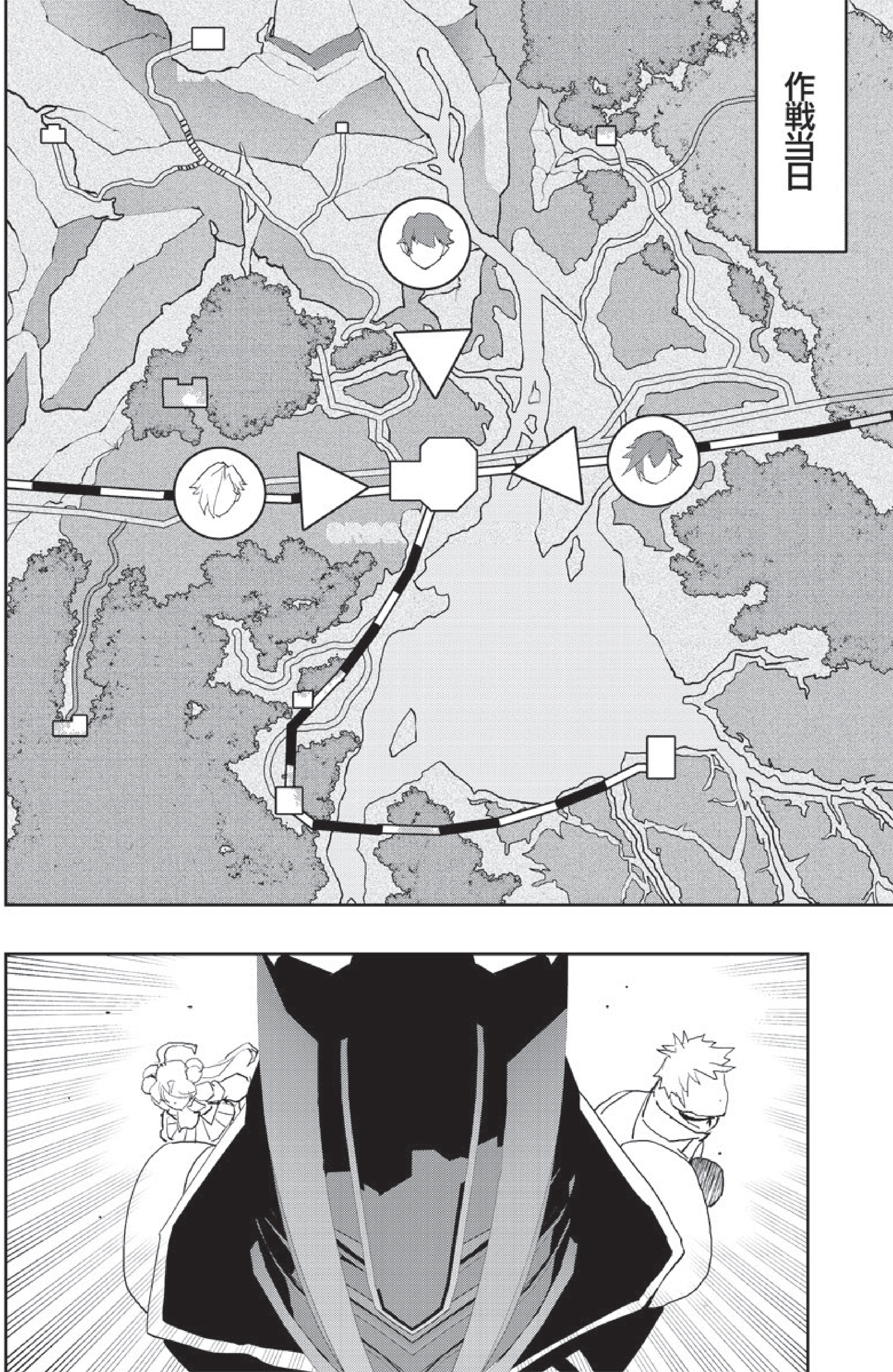

THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】
THE MISERABLE SINNERS
漫画 墨天業
原作 日本ファルコム

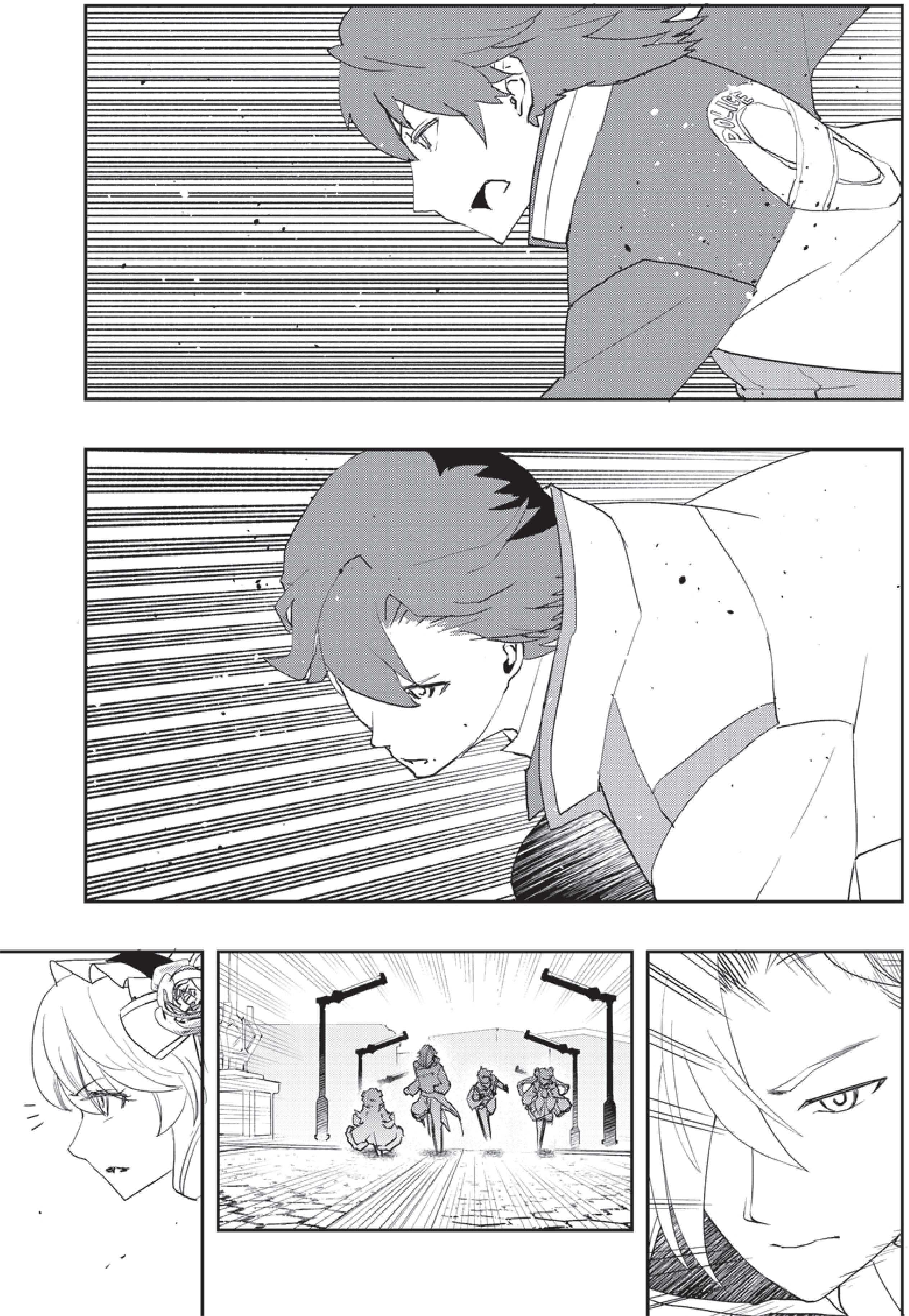

未来予知すら可能な超高度機械知性…
それがあの偽物…新総裁の登場とクロスベル占領の背景にあったものですか
そして鍵となるのはその元管理者であるという彼女——
ラピスといったか
ラピス・ローゼンベルクよ 興味本位でジロジロ見ないで
あ…ああ すまない
…しかし本当に凄いな
ローゼンベルク人形は優雅にして高貴 そこには愛おしさと慈しみがなくっちゃ
うふふ さすがは稀代の人形技師ヨルグマイスターですわね

えらく簡単に受け入れたな…
伊達に修羅場はくぐってないみたいだね～
彼女から《エリュシオン》を奪った何かが偽物の私の背後にいる
真実を見いだしクロスベルを解放するために元管理者である彼女の力は必要だろう
それらを踏まえた上で——協力を受け入れられるかね？
かつて君達を鳥かごに押し込め《黄昏》を推し進めてきたこの私と


ルーファス・アルバレア公子
クロスベル警察特務支援課として
その申し出 受けさせてもらいます
でもすみやかに街を解放できれば
各種交渉もまだ間に合うはずよ
…こうしているうちに
共和国もすでに対応に
動き始めているでしょう
リベール組も
同じ気持ちです
…それとは別に兄上には
言いたいことが山ほどありますが
もちろん俺たち
トールズもだ

ふふ
すべてが終わった後でなら
いくらでも付き合おう
それでは——
只今をもって
我々も君達とともに
戦わせてもらう
私自身の咎とやり残しを
片付けるためにも いや…
もはやそれだけでも
なくなっているのかも
しれないが…

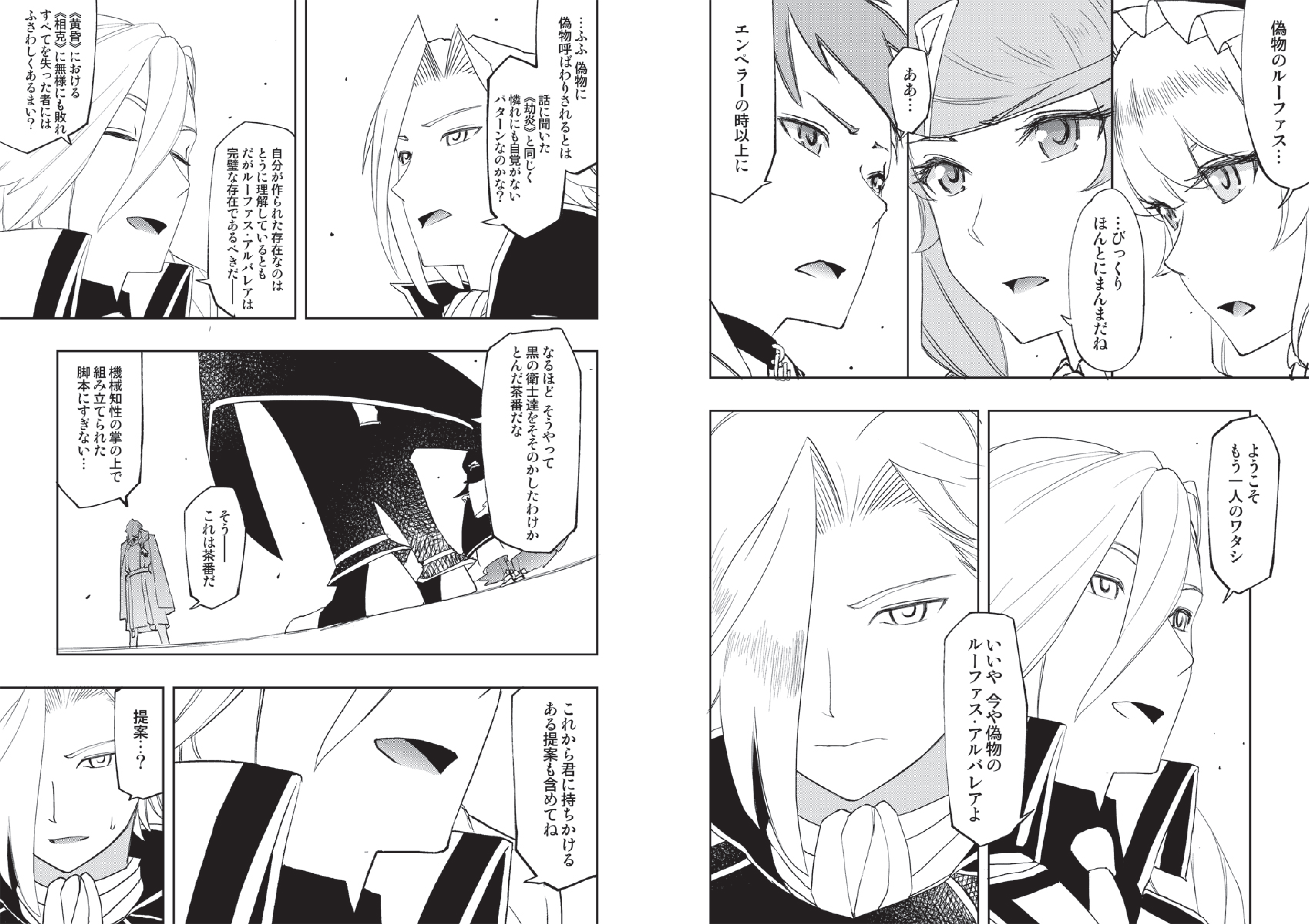

作戦当日





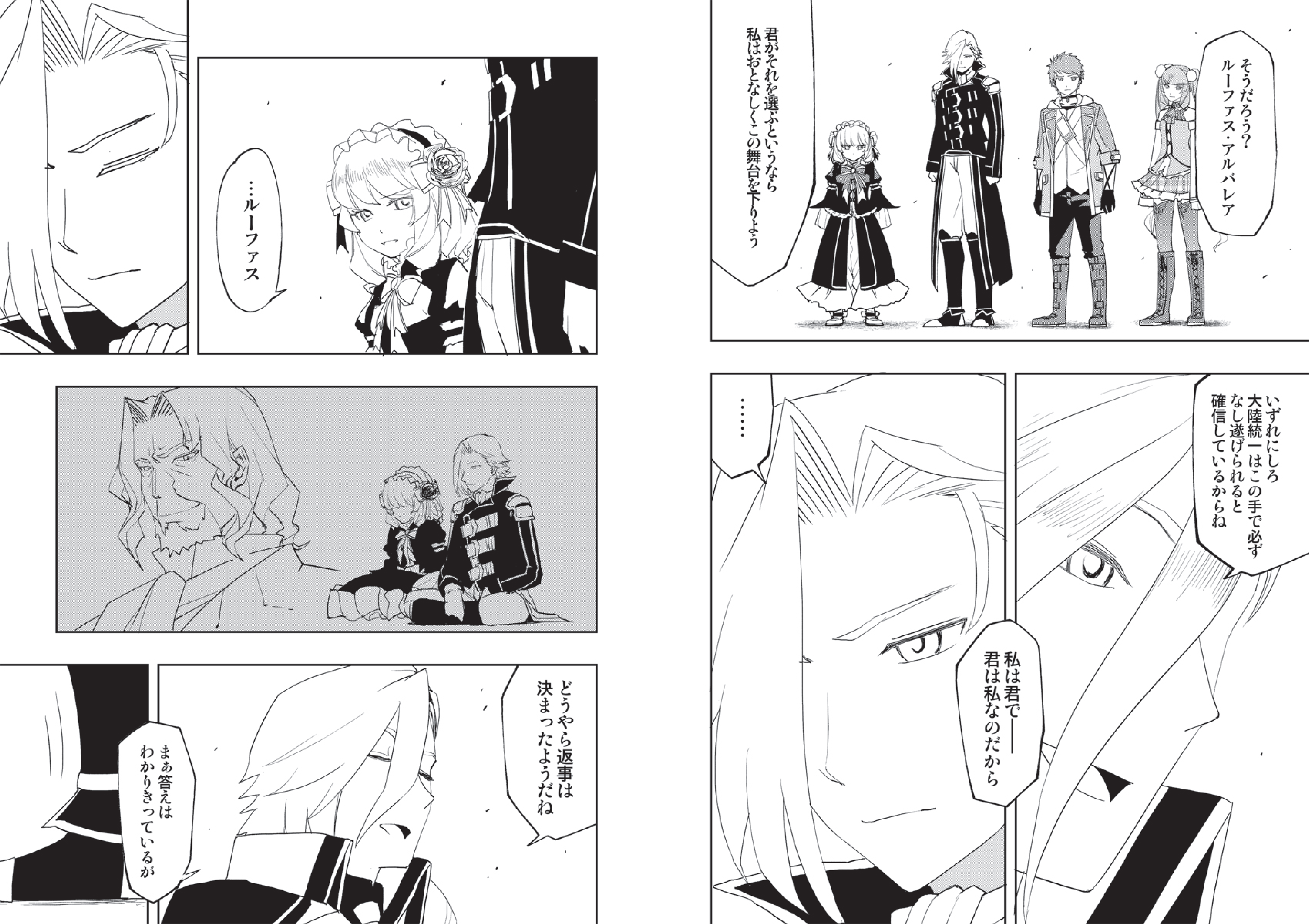


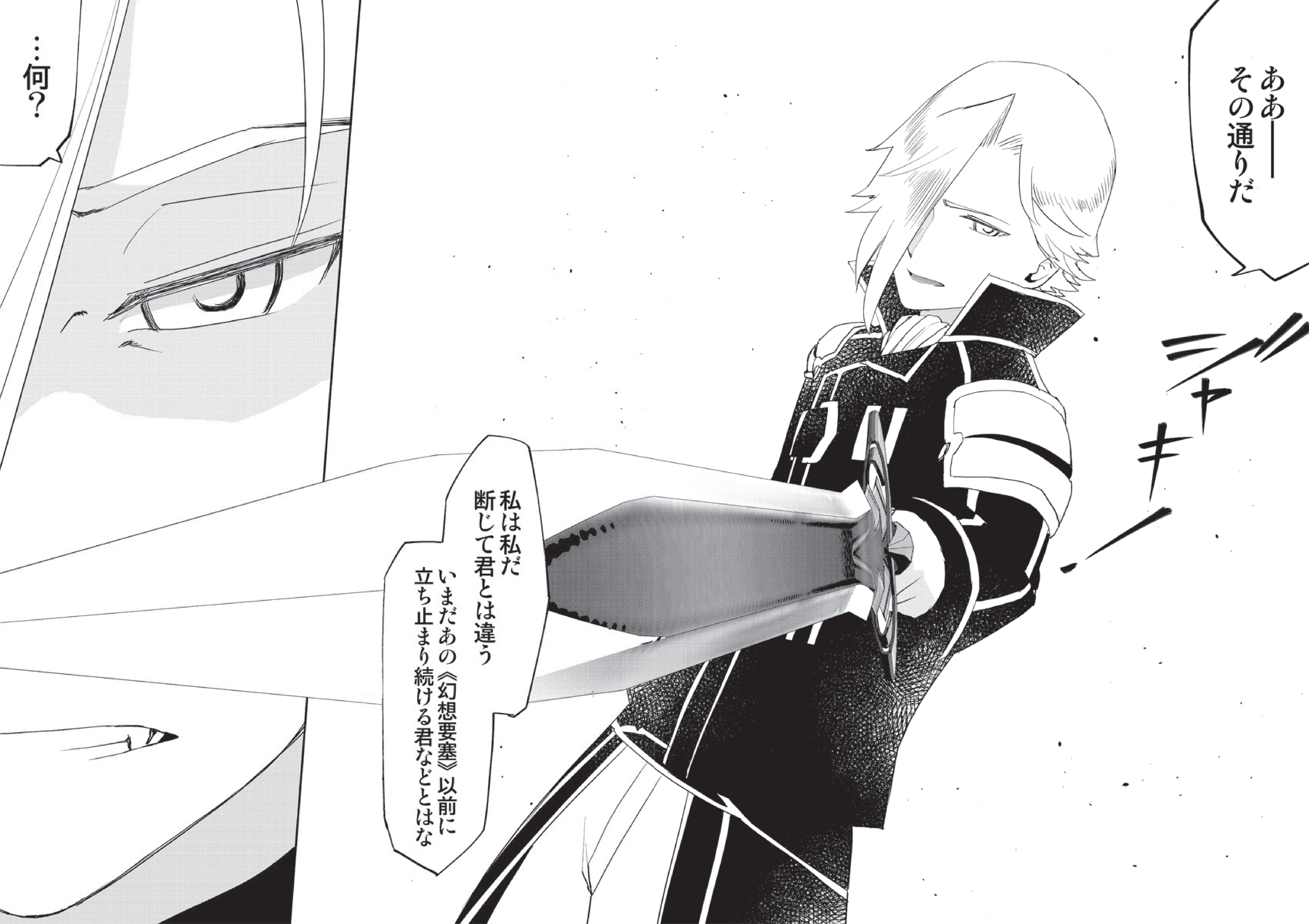
——ふふ やはり最初に たどり着いたのは
君達か


偽物のルーファス…
…びっくり
ほんとにまんまだね
ああ…
エンペラーの時以上に
ようこそ
もう一人のワタシ
いいや 今や偽物の
ルーファス・アルバレアよ
…ふふ 偽物に
偽物呼ばわりされるとは
話に聞いた
《劫炎》と同じく
憐れにも自覚がない
パターンなのかな?
自分が作られた存在なのは
とうに理解しているとも
だがルーファス・アルバレアは
完璧な存在であるべきだ――
《黄昏》における
《相克》に無様にも敗れ
すべてを失った者には
ふさわしくあるまい?
なるほど そうやって
黒の衛士達をそそのかしたわけか
とんだ茶番だな
そう――
これは茶番だ
機械知性の掌の上で
組み立てられた
脚本にすぎない…
これから君に持ちかける
ある提案も含めてね
提案…?


簡単な話さ――
この役割を引き継ぐ気はないかね？
今度こそ本物のクロスベル統一国新総裁として
支離滅裂～
もしかしてバグっちゃった？
エリュシオンにとっては最初からどちらでもよかったということさ
本物か否かを置いておけば我々は寸分違わず同じだからね


ただ二人は必要ない――どちらか一人は残り一人は消える
そして選択権はオリジナルである君の方にあるというわけだ
いまだかつて何者もなし得なかったゼムリア大陸の統一という大偉業
それをこの手でなす事ができた時私は初めて自らの存在意義を証明できる――
ググ…
世界大戦の先に新たな世界を築こうとした父をようやく越えられる
……
まさか今さら誇りなどを持ち出すつもりもあるまい
大望を果たすためならばあらゆるものを棄てられるのが私という人間だ
家も弟も自分自身すらもね


そうだろう? ルーファス・アルバレア
君がそれを選ぶというなら 私はおとなしくこの舞台を下りよう
いずれにしろ 大陸統一はこの手で必ず なし遂げられると 確信しているからね
私は君で── 君は私なのだから
……
…ルーファス
どうやら返事は 決まったようだね
まぁ答えは わかりきっているが


ああ――
その通りだ
ジャキ―
私は私だ
断じて君とは違う
いまだあの《幻想要塞》以前に
立ち止まり続ける君などとはな
…何？


越える越えないなどという次元の話はとうに終わっているのだよ
父は——彼はただ愛する者を愛しなすべき事をなしただけなのだから
その程度もいまだ理解できずに完璧を自称するとは笑わせる
消えるがいい偽りのワタシ——忌まわしき我が罪の幻影よ
新たに歩み始めたクロスベルにこの大陸にそのような存在は必要ない
その顔で父の器を語られるのもそろそろ不愉快になってきた所だしね
…ルーファス！
…やれやれまたとない好機をみすみす手放すとはな
やはり君はもはやルーファス・アルバレアではない


――ならば今こそ私がオリジナルとなろう
大陸統一という大望を果たし人々を導く次代の指導者として…!
Fortsetzung folgt

ファルコムニュース

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

DMM、DL siteでPCソフトDL版50%OFF　5月9日まで！

DL site、DMM GAMESでファルコムのPCソフトDL版が、5月9日までのセール期間中、50％OFFでご購入いただけます。
DMMでは、さらにNIS Americaから発売中の『英雄伝説 閃の軌跡III』PC版も50％OFFに！









※ご購入前に、販売ページに記載の動作環境を必ずご確認ください。

DL site

セール期間
2022年3月31日（木）～2022年5月9日（月）13:59まで
商品ページ
https://www.dlsite.com/soft/circle/profile/=/maker_id/VG01562.html

DMM GAMES

セール期間:2022年4月22日（金）～2022年5月9日（月）16:59まで
商品ページ（ファルコム作品）
https://dlsoft.dmm.com/list/article=maker/id=69012/

【ファルコム作品対象タイトル】
『イースVI-ナピシュテムの匣-』
『イース-フェルガナの誓い-』
『イースI&IIクロニクルズ』
『イース・オリジン』
『英雄伝説 空の軌跡 FC』
『英雄伝説 空の軌跡 SC』
『英雄伝説 空の軌跡 the 3rd』
『英雄伝説 零の軌跡』
『ツヴァイ2プラス』
『ツヴァイ！！』
『ザナドゥ・ネクスト』
『ぐるみん』
『VM JAPAN＋パワーアップキット』
『ブランディッシュ4 眠れる神の塔』
『モナークモナーク』
『英雄伝説V 海の檻歌』
『英雄伝説IV 朱紅い雫』
『英雄伝説III 白き魔女』
『新英雄伝説』
『ソーサリアンオリジナル＆フォーエバー』
『Vantage Master』
『ヴァンテージマスターオンライン』
『ダイナソア～リザレクション～』

商品ページ（NIS America）
https://dlsoft.dmm.com/list/article=maker/id=58733/

【NIS America対象タイトル】
『英雄伝説 閃の軌跡III』　『英雄伝説 閃の軌跡III デジタル限定版』　『英雄伝説 閃の軌跡III <DLC各種>』

『VRファルコム創立40周年展』開催中！VRアバター『みっしぃ』も絶賛発売中！

2021年7月より全国7会場で巡回を行ってきた『ファルコム創立40周年展』がVRバージョンになって開催中。
さらに、VR Chat等で使用できる公式3Dアバター『みっしぃ』も販売中です！



VRアバター『みっしぃ』
日本ファルコムのマスコットキャラクター『みっしぃ』が、VRChat等で使用できる公式3Dアバターとして登場！『閃の軌跡』シリーズで使用された実際の3Dモデルを、そのままVRアバターとして利用できるようにした製品です。



VRエンタスとは
「秋葉原エンタス」を再現して造られたVRChat内にあるバーチャル空間。VRChatの推奨環境があればVRゴーグルをお持ちでなくても入場可能です。ワールドは常時開いているので、いつでもご参加いただけます。




開催期間：2022年4月1日（金）～5月8日（日）
開催場所：「VRChat」内「VRエンタス」　**料金：**入場無料

販売ページ	イベント特設サイト
https://cospa.co.jp/event/id/22788	https://www.geestore.com/event/gallery/falcom40th/

閃の軌跡シリーズ『リィンの抱き枕カバー』イラスト公開中！

「閃の軌跡シリーズ」『リィン・シュバルツァー』抱き枕カバーの発売が決定。ユーザーアンケートの結果をもとにした描き下ろしイラストで、表には『閃の軌跡II・旅装束』、裏には『閃の軌跡III・教官服』がプリントされます。
完全受注限定生産品のため、予約は5月9日まで！



サイズ：W500mm×H1600mm

予約期間：2022年5月9日（月）まで
※期間後の販売はございません。期間内にご予約ください。
発売日：2022年6月頃
販売価格：￥13,800（税・送料込み）
発送地域：日本国内限定
発売：株式会社フジボウル

商品ページ
https://dakimakura.shop/details.php?title=26

4月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

THE LEGEND OF HEROES
暁の軌跡
アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
４月はおなじみの「ナハトの奮闘記」が開催！ また、GW に向けて様々なイベント、
キャンペーンも開催中なので、詳しくは公式 HP をチェック！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj



黒魔女・マリアベル
マリアベルが衣装替えで黒魔女に！ もともと錬金術師ではあったものの、持ち前の雰囲気も相まってシンクロ率は抜群。これまでの大きな特徴だったツインテールから髪型が大幅に変わったのがなんとも新鮮だ。

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.17 シェラザード編」実装！

クロスベル市某所――。
ギルドが掴んだ情報を基に、低所得者を狙った高金利の“闇金”の
実態を暴くべく２人の遊撃士が動き出した。
これはナハトとシェラザードによる潜入調査の記録である。









※現在は開催終了しています

※画像は開発中のものです。 ※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

思いを新たに、もう一度耳を傾けてみよう。
帰ってきた『那由多の軌跡』サウンドトラック

『那由多の軌跡 アド・アストラ』
オリジナルサウンドトラック

長らく廃盤だった『那由多の軌跡』サウンドトラックCDが、Nintendo Switch版『アド・アストラ』の予約特典として復活する。Switch版の音楽関連アップデートは音質改善のみなので、楽曲そのものは当時と全く同じ。しかし新デザインの特製パッケージでのCD提供となるので、旧盤を所有している方や、日頃オンライン配信版で聴いているという方も、この機にぜひ思いを新たに、特典CDを手にしてほしい。 Text by hally (VORC)

Switch版予約特典CDを見逃すな！

「アクションRPGらしさ」を体現しきった音楽

『那由多の軌跡』といえば、《軌跡》シリーズの一作でありながら、システムも世界観も他作品とは大きく異なるという、ユニークな位置付けの作品である。BGMの音楽性もまた《軌跡》シリーズの伝統には収まりきらないが、いっぽうで他のどのシリーズ作品にもまして、日本ファルコムの音楽的伝統を色濃く感じさせるものでもある。

『那由多の軌跡』の音楽が「日本ファルコムらしさ」に深く根ざしているのは、アクションRPGであればこそだ。日本ファルコムは1980年代の黎明期からこのジャンルを支え続けてきた老舗中の老舗であり、『イース』や『ソーサリアン』といった作品を次々とヒットさせていく中で、熱くメロディアスに魅せるヒロイックな音楽を、自社のサウンドカラーとして定着させてきた。90年代以降は音楽性を多様化させていくとはいえ、この時代に培われた「メロディ」「サビ」「起承転結」の三本柱を重視する姿勢（いわゆるファルコム音楽三原則）は、現代に至るまでファルコム・サウンドの掟として受け継がれている。つまり音楽的な意味においてもアクションRPGと「日本ファルコムらしさ」とは、切っても切り離せない関係にあるのだ。

『那由多の軌跡』の各ステージ楽曲は、そのことを端的に示している。どの曲も分かりやすさとテクニカルさを高水準で兼ね備えた、いい意味で昔ながらの王道アクションゲームサウンドなのだ。流麗で一本気なポップロック～ポップオケのあり方は『イース』シリーズにも通じるもので、そこにはFM音源時代から一貫するファルコム流の音楽哲学が力強く息づいている。しかもステージ数に比して楽曲の数がきわめて多い。各ステージには四季の変化があり、それぞれの季節に合わせて異なる楽曲が用意されているため、良質なアクションサウンドが全曲の半分近くを占めるという結果になった（ボス曲も含めて）。ゲーム音楽に「熱さ」を求める層にとって、この構成は堪らないはずだ。

『那由多』らしさと『軌跡』らしさ

ラテン調の民族音楽を採り入れた日常シーンの楽曲も、本作を象徴するものといえるだろう。その数は決して多くないが、ゲームプレイ中もっとも頻繁に聴くことになるので、その存在感はひとしおだ。これらが主人公たちの生活する離島の南国感を鮮やかに描き出しており、そこが他のファルコム作品にはない独自の色彩となっている。

いっぽうそうした日常からの逸脱——つまり物語パートには、《軌跡》シリーズとしての音楽的性格が滲み出ている。アコースティック系を中心とする過度に主張しない音使いによって、登場人物たちの感情を時に繊細に、時にドラマティックに描写する。そのあり方や質感は、文句なく《軌跡》の系譜に位置するものといえるだろう。

アクション～日常～物語のそれぞれにかなり異なる音楽性を持たせながら、総体的にはそれらを破綻なくまとめあげる。もちろんそれはサウンドスタッフの秀逸な手腕があればこそのものだが、多分それだけではうまくいかなかっただろう。ロストヘブンという不思議な舞台装置があってはじめて、さまざまな音楽志向をひとつところに繋ぎ止めうるのだ。小さな島国におけるひと夏の物語が、壮大で悲壮な創生譚へと発展していく——そんなシナリオと世界観のダイナミクスにひとつひとつの楽曲が歯車として丁寧に嵌め込まれることによって。『那由多の軌跡』サウンドの本質は、どこまでもロストヘブンと共にあるのだ。



第1話
『ティオとみっしぃの日』

やわらかな陽射しの降り注ぐ昼下がり。
早朝から任務に出ていたロイドは、ようやく特務支援課へと帰ってきた。昼食は取り損ねたけれど、ティータイムには間に合いそうだ。
リビングとしても使っている会議スペースに顔を出す。
「やあ、ただいま」
ロイドの声に、テーブルを囲んでお茶をしていた三人ともが、顔をあげる。
赤毛の青年――ランディが、ビッと片手を振った。
「よおっ、遅かったな！　どっかのお嬢さんと、お楽しみだったか？」
「お嬢さんではないけど、荷物を届けた先でね……」
「ほう⁉」
「お婆さんの話が終わらなかったんだ」
「それは、お楽しみじゃねえよ！」
「ロイドは真面目なのよ、ランディと違ってね」
ため息まじりに肩をすくめたのは、パールグレイの長髪が美しい少女――エリィだった。
その隣に座っていた少女が、席を立つ。
「ごちそうさまです」
ライトブルーの髪に白い肌――ティオは、まるで子どものように見える。実際十四歳でしかなく、本来ならば特務支援課の危険な任務に参加するような年齢ではない。
しかし、彼女は魔導杖（オーバルスタッフ）を使いこなす実力者だ。
ティオは半分ほどミルクの残ったマグカップを持つと、ロイドの横を通り過ぎていく。
「…………ジト」
「え？」
すれ違いざま、睨まれたようにロイドは感じた。
自室へ戻ろうとするティオに、エリィが声をかける。
「ティオちゃん、明日は何時に出る？」
「……午後は混雑すると思います。朝食のあと、すぐに出発しましょう」
「そうね！　そうしましょ」
「はい」
いつも無表情でクールなティオだが、仲間に見せるやわらかい微笑みを残して、会議スペースから立ち去った。
ロイドは入れ替わるように座る。
エリィが紅茶と――昼食抜きを察したのか、パンケーキを切ってくれた。
「ありがとう」

「これ、私とティオちゃんで焼いたのよ」
「そうなんだ、美味しそうだね。そういえば、エリィたち、明日どこか行くのか？」
「ええ、私たち非番だから、ティオちゃんとお洋服を買いに行こうと思って」
「なるほどね……じゃあ、べつに機嫌が悪いってことはないのか……俺の気のせいだったのかな？」
「どうかしたの？」
「うーん……さっき、ティオに睨まれたような……？」
　ほほう、と身を乗り出したのは、ランディだった。
　ニヤリと笑う。
「そういや、最近、ティオすけがロイドにだけそっけないよな～」
「うっ……やっぱり？」
　他の人までそう感じるということは、自分の気のせいではないのだろう。
　エリィがテーブルを叩く。
「もしかして、ティオすけに何かしちまったのか？　あんなこととか、こんなこととか⁉」
「冗談でしょ⁉　まだティオちゃんは、子どもなのよ⁉　あ、子どもじゃなければいいってわけじゃないけど……とにかく、ダメよ！　そんなの」
　子どもなんだから——とエリィは強調する。



ロイドは首をかしげた。
「俺はティオのこと、子どもだとは思ってないけど……？」
「えっ⁉　まさか、ロイド……本当に……⁉」
エリィが唇を震えさせる。
ランディまで驚いて目を見開いた。
「おいおい、マジかよ……⁉」
そんな反応をされるとは意外だ。
「ふたりとも、どうしたんだ？　ティオは一人前の支援課メンバーだろ？　大人と同じように接するべきだと思うけどなあ」
エリィがパタパタと手を振る。
「あ、そうよね！　そうね！　ティオちゃんは立派な支援課のメンバーだものね！」
ランディがうなだれていた。
「まぁ、ロイドだもんな～。どうせそんなことだろうと思ったぜ」
「な、なんだよ……俺、変なこと言ってないだろ？　それより、ティオのことだよ」
「そうだな。まぁ、そんなに難しいことじゃない」
「わかるのか、ランディ⁉」
「ロイド、よく聞け――何もしてないのに女が冷たいときの理由は三つしかない！　気づかず傷つけることを言ってしまったか、何かして欲しがってるのに何もしないからか、約束を忘れてるからか、浮気が見つかったかだ！」
「三つしかないと言いながら四番目があるうえ、それは俺とぜんぜん関係ないと思うけど……」
「数字なんて細かいことさ」
おおざっぱな性格のランディだった。
エリィが思案顔をする。
「ん～……ロイドってとんでもなく鈍いところがあるけれど、傷つけるようなことは言わないと思うわ」
「じゃあ、決まりだな！　何かして欲しがってるのに何もしないからだ！」
「何かって？」
ロイドの問いに、ランディが口ごもる。
「つまり、ナニカというのは……ええっとだな……はぁ、どっちもお子様みたいなものだし、その線はないよな」
「その線？」
「もう、ランディはバカなことばかり言って……あとは、約束を忘れてるとか？　ロイドに限って、そんなことないわよね？」

「約束か……忘れたりはしてないけど、まだ果たせてない約束ならあるかな」
「そうなの？」
「ああ、前にティオと、『ふたりでミシュラムのテーマパークに行く』って約束したんだ」
「「は⁉」」
「でも支援要請は尽きないし、非番が重なっても、なかなか休めなくて……」
「待て待て！　非番の日でも仕事してるな～とは思ってたけど、そんな約束を放ったらかしてたのかよ⁉」
「ふたりで行くって、どういうこと⁉　ティオちゃんとふたりっきり⁉　ティオちゃんとロイドだけでテーマパークに行くの⁉」
　いきなり詰め寄られて、ロイドはひっくり返りそうになる。
「あ、ああ……」
　すべて肯定だった。
　突き飛ばされた。
　派手な音をたてて床に転がる。
「イテテ……何するんだよ？」
「それは、こっちのセリフだ、馬鹿野郎！　いいかよく聞け！
　女の子との約束は緊急支援要請にも勝る‼」

　ずどーん、とランディが断言した。
「なんだって⁉」
　ロイドの背後で雷が鳴った——気がした。
　エリィがため息をつく。
「それは言い過ぎにしても、さして緊急でもない仕事より後回しにされてたら、約束を守る気がないか、忘れてると思っちゃうわね……ティオちゃんがかわいそうになってきたわ」
「いや、俺は忘れてたわけじゃなく、プライベートなことよりも仕事を優先しないといけないと思ってさ。だって俺たち特務支援課っていうのは、この街（クロスベル）の平和を守るためのものだから……」
「女の子の幸せより優先すべき平和なんてない‼」
　ふたつ目の雷鳴だった。
「非番を代わってあげるから、今からティオちゃんを誘ってきたらどう？」
「そんな、エリィ。悪いよ」
「私よりティオちゃんに悪いでしょ。ずっと待たせてたなんて」
「うっ……わ、わかりました」

「今すぐ！」
「は、はい！」
そのようなわけで、ロイドはティオを連れて、ミシュラムワンダーランドに行くこととなった。

翌日――
水上バスの扉が開くと同時に、ティオが桟橋へと降り立つ。すたすたと正門へ向かった。
クールを装っているが、脇目もふらず、歩みも明らかに早い。
「ロイドさん、ミシュラムです」
「あ、ああ……」
それは当然なのだけれども、瞳を輝かせているティオを見たら、ロイドは何も言えなくなった。
つまり、自分の考えている『ミシュラム』と、ティオの言っている『ミシュラム』は重みが違うのだろう。
ロイドは出発前にランディに言われたことを思い出す。

「いいか？　女の子を連れて行くってのはな、ただ行けばいいってもんじゃない」
「えっ、そうなのか？」
「その場所で楽しい思い出を作ってこそ、だろうが」
「楽しい思い出……」
「ああ、一生モノの楽しい思い出だ」
「一生モノの!?　なるほど、ティオと約束したときは、そんな簡単なことでいいのかと思ったけど……俺が甘かったようだ」
「百戦錬磨の俺が、ばっちり教えてやるよ」
「ありがとう、ランディ」
そうして、空が白むまで〝一生モノの楽しい思い出〟の作り方を教わった。

「よし、今日は気を引き締めていかないとな」
「どうかしましたか、ロイドさん？」
「あ、ええっと……まずは入園チケットを買わないとね」
「それなら大丈夫です。この日のために、ＭＷＬ（ミシュラムワンダーランド）ワンデーフリーパスを買っておきました。すべての施設で自由に遊べて、ランチとドリンクまでついてきます」

「え？　それだと、俺が連れてきてもらったみたいになっちゃうけど……」
「……はっ⁉」
「もしかして、ずっと楽しみにしててくれた？」
「そ、それは……当然です」
「……ごめんな、待たせちゃって」
「いえ、わたしの一方的なお願いでしたから。あと、勘違いしないでください……わたしが楽しみにしていたのは、みっしぃに会えることですので」
「うん？　それはわかってるよ。ティオは大のみっしぃ好きだもんな」
「……ぜんぜん、わかってません」
「え？」
　すたすた、とティオが足早に進んでしまう。
　もしかして機嫌を損ねてしまったのだろうか？　ロイドは小首をかしげる。
　──なるほど、こいつは難度の高いミッションだ。
　小さく拳を握りしめると、ティオの後を追いかける。非番ということで装備(トンファー)は置いてきた。武器が役立つ状況とは思えないが、それだけに心許なかった。

　ロイドたちはゲートをくぐり、ワンダーランドの奥へと進んでいく。
　ふたりの後ろに、距離を置いて物陰に隠れつつ尾行する者の姿があった。
　ランディである。
　彼と一緒にエリィもいる。
　それに、支援課で面倒を見ている身よりのない女の子──キーアもいた。
　ランディは懐からオーブメントを取り出した。多様な機能を持った第５世代戦術オーブメント、通称《ＥＮＩＧＭＡ(エニグマ)》は、通信機能も備えている。
「こちら、ランディ……目標はミシュラムに入ったようだぜ」
　スピーカーから流れてくるのは、彼らの上司であるセルゲイ課長の声だ。
『対象の様子はどうだ？』
「今のところ、手もつないでねぇな。現在、正門から鏡の城方面に向かって移動中」
『この支援要請の重要度は〝緊急〟だ。最優先で当たってくれ』
「了解！」

鋭い返事をし、ランディはエニグマを懐に戻した。
エリィが目を丸くする。
「これ緊急なの⁉　ていうか、支援要請なの⁉」
「そうだ」
「本部に報告されちゃうの⁉」
「……依頼者は、ロバーツ主任らしいぞ」
「頭痛がひどくなりそう……」
ロバーツ主任とは、ティオの出向元であるエプスタイン財団の研究者で、彼女の上司にあたる人物だ。
あっ、とキーアが指さす。
「ロイドたち、アイス食べてる！　いいな～、キーアも食べたい！」
「着いて早々に食べ物かよ……どういう段取りしてんだ、あいつらは？」
「ねえねえ、キーアもアイス食べたい」
「ついて来るならワガママ言わないって約束じゃなかったか？」
「ううぅ～……」
涙目になりながらも、キーアは下唇を噛んでがまんした。
ランディが肩をすくめる。

「しゃーねえな、後で買ってやるから。な？」
「ホント⁉　ランディ、やさしい～」
「あら、ごちそうさま」
「お嬢もかよ⁉」

ロイドたちは、みっしぃアイスを食べていた。
みっしぃをイメージしたグレーとホワイトのツートンアイスに、みっしぃの絵がプリントされたクッキーが乗っている。
「おいしいかい、ティオ？」
「はい……何より食べることができてよかったです。このみっしぃアイスは期間限定のうえ、１日３４４個限定で昼にはなくなっていると評判でした」
「なるほどね」
だから、まず最初に来たというわけだ。
ランディには、休憩するのは三つくらいアトラクションを回ったあとがいいと言われたけれど、ここは臨機応変に対処して正解だったろう。

味は普通のアイスだったように思うけれど、ティオが喜んでくれたならよかった。
「さて、どこへ行こうか」
ロイドは周りに視線を巡らせる。
ミシュラムのテーマパークは、楽しげな施設がいっぱいあった。先が長い。
そのなかでも目を引くのは鏡の城だろうか。
たたっ、と急にティオが駆けだした。
「え？　ティオ⁉」
「ロイドさん、みっしぃです！」
見れば彼女が駆けていく先には、みっしぃがいた。
こうして、着ぐるみに瞳を輝かせる姿は、歳相応の子どもにしか見えない。
こんなに喜んでくれるなんて、連れてきてよかったな、とロイドは思った。
「なにしてるんですか、ロイドさん！」
「え？」
見れば、カメラを持ったスタッフが待っている。
ティオのほうも、みっしぃの横に立って、髪を手櫛で直したりして、準備万端だ。
「記念撮影です」
「ああ、そうか。え、俺も写るの？」

「当然です……ロイドさんと来た記念なんですから」
「なるほど」
「ロイドさんは、そこ。動かないでください。みっしぃが隣で、わたしがその隣です」
「はい」
「みししっ★」
テキパキとしたティオの指示に、ロイドもみっしぃも軍隊の兵士みたいにビシッと従う。
みっしぃを中心に、左右に並んだ。
バックは鏡の城。
太陽は右上に輝いている。
なるほど、こだわりを感じさせるポジショニングだ。
スタッフが声をかけ、パシャリとカメラのシャッターを押した。帰りに正門の近くで受け取れるらしい。
「この写真、大切にします」
ティオが表情をほころばせ、熱っぽく語る。その相手は、みっしぃだったが。
「みししっ、楽しんでいってね～」
「はい」
みっしぃが、ぽむぽむとティオの頭をなでる。

いつものクールな表情のまま、頬を紅潮させているのが、なんだか微笑ましかった。
背後から甲高い声があがる。
「おっ、みっしぃだ!」
「わーい、みっしぃだ～‼」
小さな子どもたちが駆け寄ってきた。
ティオは名残惜しそうにしつつ、みっしぃから離れる。
みっしぃはMWLの大人気マスコットで、もう記念撮影も終わったのだから独占するわけにはいかない。
それでも、すこし離れたところから、その姿を見つめ続ける。
走ってきた男の子ふたりが、みっしぃに体当たりした。抱きついたのかもしれないが。
「うおー、おれ知ってんぞー、みっしぃって、中に人いるんだろー⁉」
「見せて見せてー‼」
「みししっ、そんなことないよ～?」
「でも、父ちゃん言ってたもん!」
「言ってたー‼」
「みしし……」
スタッフまで弱り顔だが――教育方針は、ご家庭により様々だから仕方ない。やや無粋

だとは思うけれど、とロイドは肩をすくめた。
「みっしぃも大変なんだな、ティオ」
感情の消えた顔をした彼女が、つかつかと歩いていく。
「……」
「えっ、ティオ?」
「あなたたちは、間違っています」
いきなり子どもたちに説教をしだした。その威圧感に子どもたちがたじろぐ。
「だって……父ちゃんが……」
「それは嘘です。みっしぃの中に人など入っていません」
「じゃあ、どうしてしゃべってるんだよー⁉」
「みっしぃは、しゃべるものです。当然でしょう。なんの不思議もありません」
ティオが本気で舌戦をはじめてしまった。
説得できればよかったけれど、そうそう都合よくいくはずもない。
「んじゃあ、みっしぃの頭を取ってみようぜ! そしたら、わかるだろー⁉」
「……ッ‼」
無表情だったティオに怒気が宿った。
すっ、とリュックのなかに手を入れる。

ロイドがトンファーを置いてきているように、ティオもまた今日は魔導杖を持ってないわけだが。
その手には、戦術オーブメントが握られていた。
「エニグマ、駆動……」
ティオが魔法（アーツ）の準備に入る。
「待った！　待った！　ティオ、もう行こう！　そうだ、鏡の城に行ってみようか！」
慌てたロイドは、彼女の手をつかみ、引っ張って連れ出した。
「君たちも、みっしぃを困らせちゃダメだぞ!?　じゃあね！」
ティオの迫力に涙ぐんでる男の子たちと、ゆるゆると手を振るみっしぃと苦笑するスタッフを残してロイドたちは鏡の城へと向かった。

離れたところから、その様子を眺めていたのは、三人――ランディ、エリィ、キーア。
「ねえねえ、ランディ」
「なんだ、キー坊？　まだアイスは無理だからな」
「みっしぃの中に人なんて入ってないよね？」

「え!?　あ～いや、それは……まぁ……いないような、そうでもないような……」
「だって、みっしぃはみっしぃでしょ？」
「ああ、そうだな……そうだといいな」
ランディが、キーアの純真な瞳に苦悩していると、ハッとエリィが息を呑んだ。
「大変！」
「どうした、お嬢!?」
「ロイドとティオちゃんが……!!」
慌ててランディは、草むらに身を隠しつつふたりへと視線を送る。
まだ不服そうなティオを引きずるようにして、ロイドが鏡の城を指さしていた。
エリィが声を絞り出す。
「手……つないでる」
「……ああ、そうだな」
「つないでる……」
「まぁ、テーマパークだしな」
手くらいつないで当然だろう――お嬢も、たいがい初心（ウブ）だな、とランディは息を吐いた。
キーアが、そっとエリィの手をにぎる。
「エリィも手つなぎたいの？　じゃあ、キーアがつないであげるね」

「ん……ありがとう」
エリィの表情がやわらぐ。
えへへとキーアが笑い返した。

鏡の城に着くと、鐘の音が聞こえてきた。
見上げる。
「この鏡の城の一番上には、鐘があって……ふたりで鳴らすと、願いが叶うそうですね」
「そうらしいね」
入園時にもらったパンフレットに、そう書いてある。
ロイドは城を見上げた。
「ティオは鐘を鳴らすとしたら、どんなお願いをするんだ？」
「……そうですね」
じっ、と見つめてくる。
なんだろう？　とロイドは言葉を待った。
見つめ合う。

ティオが、かすかに頬を染める。
「……ロイドさんと……もっと……」
「ん？　俺と……なに？」
「……………いえ、なんでもないです」
「？」
「ロイドさんと……なかなか見つからないという、みーしぇを探したいです」
「ああ、みーしぇか」
みっしぃの妹のピンク色のマスコットだ。ワンダーランドのなかでも、とくに珍しいという噂だが、今日はいるのだろうか？
「探してみましょう……まずは、こちらから」
「わかった」
そんなわけで、唐突に、みーしぇを探して園内を駆け回ることになった。
捜査の基本は足だ！
マップに×印を記入しながらエリアを絞り込んでいく。
相手が動くといっても走って移動しているわけではないだろうから、こちらが素早く捜査ポイントを絞っていけば発見できる可能性は高い——はずだった。
広い。

ふたりで行動しているといっても、別行動というわけにはいかないから、必然的にひとりで捜査しているようなものだ。
ロイドは見晴らしのいい場所まで出て、息をつく。
「はぁ、はぁ……きつくなったら言うんだぞ、ティオ？」
「へいきです」
今日のティオは、いつになく元気だった。ロイドのほうが先にめげてしまいそう。

「はぁ、はぁ……ロイドのやつ……どういうプラン……してんだ⁉」
急に走りだしたものだから、尾行に気づかれたのかと思ったが、そうではなかったらしい。
いったい何が目的なのかわからないが、走り回るロイドたちを追いかけて、ランディたちも走らされていた。
エリィも肩で息をしている。キーアが青ざめた顔をしていた。
「あぅ……もう……だめ……キーアもう走れないよ……」
「無理するな、キー坊」

「でもひとりでは残していけないわ」
「ああ、そうだな。お嬢も残って休んでろ。俺はひとりで尾行する」
「そんな……」
「気になるのはわかるけどよ、キー坊をひとりにはできないだろ？」
「もちろん、そうね。じゃあ、落ち着いたら連絡して」
「りょーかい」
ふたりを残して、ロイドたちのほうへと足を向ける。
背後からエリィが声をかけてくる。
「ランディ、気をつけて……」
「フッ……大丈夫さ。ティオすけのセンサーは優れちゃいるが、テーマパークの騒がしさのなかじゃ、役に立たないハズだ」
「それじゃあ、私たちは休憩所へ行くわね」
「ああ、俺の代わりにアイスを買ってやってくれ」
「わーい、アイスー‼」
急に元気になったキーアに苦笑しつつ、ランディは走りだした。

しばらくして――

まるで犯人捜査のような熱意で走り回っていたロイドたちだが、さすがに疲労が溜まったのか、話しこんだ後、休憩所へと向かいはじめた。
ロイドが「もうすこしワンダーランドを楽しもう」と持ちかけ、「遊びながら探しましょうか」とティオが応じたわけだが。離れて尾行していたランディが知るよしもなかった。
休憩所に向かうロイドたちを見て、慌ててエニグマを取り出す。
「……やばい……出ないぞ」
そういえば、尾行任務ということでエニグマは音がしないように設定してあった。
鉢合わせなんてことになったら、大変だ！
ランディはエニグマでの呼び出しを繰り返した。

その頃、エリィは休憩所の店外にあるパラソルテーブルでくつろいでいた。
走り回っているランディには悪いと思ったが、休憩するからには最大限に休むのも任務のうちだ。
キーアにアイスを買ってあげ、自分はクッキーとアイスレモンティーを頂いた。
みっしぃのプリントされたクッキー。こんな日でなければ、ティオのためにお土産にし

たかもしれない。
「あ」
キーアが指さす。
「なに？」
「ロイドとティオだ」
「え!?」
慌てて視線を向ければ、たしかに疲れた足取りで歩いて来るロイドたちの姿があった。
エリィは席を立つ。
「隠れるわよ、キーアちゃん！」
「なになに、こんどは隠れんぼー？」
「そんなところ！」
デートを尾行していたなんて知られたら、嫌われてしまうかもしれない……すくなくとも、ティオは喜ばないだろう。
店の外を走って逃げるだけの時間はないと判断し、エリィは目の前の店に入った。
建物の柱の陰に身を寄せる。
ほどなくして、ロイドたちが店に入ってきた。
ティオがメニューを指でなぞる。

「おすすめは、みっしぃカレーだそうです。甘口ですが、濃厚だとか」
「いいね。飲み物はどうする？」
「そうですね……私は、みっしぃソーダにします」
「じゃあ、俺は、みーしぇレモネードにしよう」
それぞれ、水色のソーダと、ピンク色のレモネードが出てきた。カレーも受け取って、外のパラソルテーブルに落ち着く。
エリィはふたりの様子を窺いつつ、バッグからエニグマを取り出した。着信が5件もある。
――しまった！
周りが騒がしかったから気づけなかったらしい。
すぐに連絡を返す。
「……ランディ？」
『よ～やく繋がったか！　お嬢、ロイドたちが――』
「あやうく見つかるところだったわ」
『ははは、まぁ、バレてないなら、セーフだな。目標の様子は？』
「様子……」
視線をロイドたちのほうへ移す。

ちょうど、レモネードを傾けたところだった。
「お、これ美味しいな」
「そうですか。実は、みーしぇレモネードと迷っていたのですが……」
「ちょっと飲んでみる？」
「!?　……………………いいのですか？」
「え？　そりゃ、味見くらいなら」
「量の問題ではないと思いますが……わかりました。では、い、いた、いただき、ます」
機械仕掛けみたいな固い動きでティオがレモネードのグラスを持つ。すこし迷ってから、グラスの端に唇をつけた。さすがに、ロイドの使ったストローを咥えるのは恥ずかしかったらしい。
なんとも初々しかった。
ぽつり、とエリィは漏らす。
「いいなぁ……」
『お嬢？　それが〝目標の様子〟の報告かよ？』
エニグマで通信中なのを失念していた！
「ハッ！　いえ、その……レモネードが美味しそうだったのよ」
『まぁ、そういうことにしておくか。俺も喉が渇いたな。ちょいと休ませてもらうか。店

での行動は、お嬢がフォローしてくれ』
「了解」
　エニグマをバッグに戻して、ふと気づく。
　キーアがいない⁉
　慌てて店内に視線を巡らせる。
　カウンターでジュースを受け取っているのを見つけた。
　駆け寄る。
「キーアちゃん、なにしてるの⁉」
「ロイドと同じのが飲みたくなっちゃって」
「はぁ……もう勝手なことしちゃダメよ。びっくりしたじゃないの」
「はーい」
　店員さんが安堵の笑みを浮かべる。
「ああ、よかった。お母さんですか？　みーしぇレモネード、30ミラになります」
「……ッ⁉　あの……まだ……18です」
「え？　みーしぇレモネードは、30ミラなんですが……？」
「私……この子の、姉、のようなもの……です。まだ18歳ですから」
「あっ、申し訳ありません！　大人びてらっしゃるもので！」

「いえ……」
　ぺこぺこ謝る店員に、エリィは静かに30ミラを差し出すと、ゆらゆらとカウンターを離れた。
　キーアが後をついてくる。
「ごめんね、エリィ。そんなに悪いことだと思わなくて……ジュース飲む？　ロイドが美味しいって言ってたよ？」
「……大丈夫よ、キーアちゃんはなにも悪くないわ」
　大人びて見られることには慣れているが、子どもがいると思われたのは、ちょっとショックなエリィだった。
「ぐす……まだ18歳なのに……」
　そこへ、ランディがやってくる。
「よお、調子はどうだ？」
「ちょっ⁉　ちょっと、見つかったらどうするつもり⁉」
「この店、裏側にも出入口があるんだよ。どうした？　浮かない顔して？」
　さすが女の表情には鋭い。
　でも相談するようなことではない、と思う。
「なんでもないわ」

「そうなのか？」
「ハァ～……こうして、テーマパークでキーアちゃんを連れてると、親子三人に見えたりするのかしらね？」
「なっ⁉　な、なに言ってんだ、お嬢⁉」
　ランディが珍しく焦っていた。
「どうかしたの？」
「いや、お嬢もたいがい……やれやれ、なんでもねえよ」
　キーアは、みーしぇレモネードを飲んで御満悦だった。
「おいしー‼」

　ロイドたちはランチのあと、いくつかのアトラクションを見て回り――
　陽が西に傾いてきた。
「もうすぐ日が暮れるな……」
「はい」
「夜には花火とかあがるらしいよ」

「え……あの……夜ですか」
「向こうに見える立派な建物は、ホテルかな？　そういえば、ミシュラムのホテルって、どこもすごく豪華だからな」
「ホテル……⁉」
　ティオの顔が赤くなっていく。
　ぱたぱたと手で首筋を扇いだりして。
　そんな彼女の様子など、ロイドは気づくはずもなく。
「ねえ、ティオ」
「……っ⁉」
「明日も仕事だから、暗くなる前に帰ったほうがいいと思うんだけど……ん？　どうかした？　疲れてるのか？」
「い、いえ……そうですね。わたしとしたことが……わかりました。では、次で最後にしましょう」
「どれがいい？」
「まだまだ、いっぱいありますが……えっと、あれに」
　ティオが選んだのは、観覧車だった。
　八角形のゴンドラが巨大な円を描いて廻っている。

「いいね」
「はい」
ロイドはティオと、ゴンドラに乗った。ごうんごうんと昇っていく。
ワンダーランドどころか、ミシュラムぜんぶが見渡せた。
穏やかな午後の陽差しに包まれた楽園。
ほぅ、とティオが吐息をこぼす。
「……素敵です」
「思い出に、なったかな？」
「え？」
「一生の思い出になるくらい……楽しめたかな？　俺は、ティオとの約束を果たせたんだろうか……？」
「ふふ……もちろんです。ありがとうございました、ロイドさん」
「よかった」
ロイドは椅子に背を預ける。
体から力が抜けていくような安堵を感じた。
観覧車から降り、ロイドたちは正門に向かって歩きはじめる。

途中、ふと売店に寄った。
「ロイドさん、なにか欲しいものがあるんですか？」
「いや……高価なものは買えないけど……これなんか、どうかと思って」
ロイドは《ラバーストラップみっしぃ》を手に取り、差し出した。
ぶんぶんとティオが手を左右に振る。
「そんな、悪いです。連れてきてもらったうえに」
「いや、今日はチケットまで用意してもっちゃったからね。ティオさえ気に入ったなら、贈らせてくれないか？」
「もちろん、かわいいと思いますけど……」
ティオが目を輝かせる。
「じゃあ、これを……」
「ロイドさん……」
そのとき、楽しいテーマパークに不釣り合いな甲高い悲鳴が聞こえてきた。
「なんだ⁉」
「なにごとでしょうか⁉」
商品はいったん置いて、ロイドは悲鳴のしたほうへと走りだす。すぐ後をティオも追いかけてきた。

逃げて来る客たちの間を縫って、ロイドたちは広場へと出た。
そこには、ペンギンに似た青色の魔獣が！
「ペングーだ！」
広場に青色のペングーが二匹いる。
まさかテーマパークに魔獣が出るとは思わなかった。
「ロイドさん、あれを！」
ティオが指さした先には、逃げ遅れている子どもの姿が。男の子がふたり、怖すぎて腰が抜けてしまっているらしい。
「あわ……わわ……わ……」
「うわーん‼」
そのふたりをかばうようにして、みっしぃが立ちふさがっている。
テーマパークのマスコットなのに⁉
ロイドは素手のままだが、ためらっている暇はなかった。市民の安全を守ってこその警察官——特務支援課だ！

全力で駆け寄り、ペングーの前へと飛びだす。
「クロスベル警察です！　ここは俺たちに任せてください！」
「みなさん、早く逃げてください」
ともに駆けつけたティオが、市民を安全なところへと誘導する。
子どもたちの手を引きながら、みっしぃが頭をさげた。
「みししっ、ありがと～」
こんな状況にもかかわらず役柄を崩さないとは……ロイドは妙なところで感心してしまった。
ティオは感動に震える。
「じーん……特務支援課に出向して以来、こんなにうれしかったことはありません」
「えぇっ、そこまで⁉」
「負けられませんよ、ロイドさん」
「あぁ、もちろんだ！」
ティオが魔法に意識を集中させる。足元に魔方陣が浮かびあがった。
「……エニグマ、駆動」
「速攻でケリをつける！」
今にも飛びかかってこようとするペングーの機先を制して、ロイドは間合いを詰めると

拳を叩きつけた。
ぎょわ！　ぎょわ！　とペングーが声をあげて、のけぞる。
「……ぐッ‼」
ロイドの拳に痛みが走った。
もう一体のペングーが嘴でつついてきた。
キシャー‼
おじぎするような動作は愛嬌があるものの、ハンマーのように重たくて固い嘴を体ごとぶつけてくる攻撃だ。その威力は半端ではなかった。
「ぐあっ⁉」
「ロイドさん⁉　この……ダイアモンドダスト‼」
足元に冷気が広がる。
ペングーの周囲に白い結晶が集まった。
氷の槍が現れる。
魔法で作られた無数の氷槍が、魔獣へと向かって飛ぶ。
命中するたびに冷気を撒き散らして氷が砕け散り、美しい輝きを放った。
水系の強力な攻撃魔法だ。
ぎょわ～～～ッ⁉　と青色のペングーたちが悲鳴をあげる。

がっくりと動かなくなった。
どうやら魔獣たちは戦意を喪失したようだ。
ティオが息をつく。
「ふぅ……敵集団、撃破しました」
「やったか……」
ところが、またも甲高い悲鳴が聞こえた。
広場にある建物の陰から、赤色のペングーが現れたからだ。しかも、八匹も！
ロイドの背筋が凍りついた。
――あんなにも数が多いなんて‼　ふたりだけでは、防ぎきれない。
魔獣たちが、グアグアと叫びながら、逃げる客を追いかける。
「やめろー‼」
ロイドは駆けつけて、赤色ペングーの横面に一撃を食らわせた。相手の注意を引きつける。
しかし、多すぎる。
六匹ほどが散り散りになって客たちを追いかけ回す。
ティオの魔法も、これほど散り散りになられては、効果範囲に捉えきれない。
――このままでは、みんなを守れない！

「くっ……どうすれば⁉」
そのとき、物陰から長身の男が走り出てきた。
聞き慣れた声が響く。
「こっちは俺に任せときな！　おおぉぉぉ……‼　クリムゾンゲイル‼」
巨大な斧槍が、ペングーたちを薙ぎ払った。
続いて、発砲音があがる。別の方向へと走っていたペングーがもんどりうって倒れた。
「ここは通さないわ！」
現れたのは、パールグレイの長髪をなびかせる美しい少女だった。
ロイドは驚いて声をうわずらせてしまう。
「ラ、ランディに、エリィも⁉」
ティオも目をしばたいた。
「……おふたりとも……どうしてここに⁉」
離れたところから、「ロイド、ティオ、がんばれー‼」と声がした。
「キーアまでいるのか⁉」
「おしゃべりは後だ！　こいつが必要だろ、ロイド！」
ランディが放り投げたのは、使い慣れた装備（トンファー）だった。
「持ってきてくれたのか⁉」

「こんなこともあるかもしれん、ってセルゲイ課長がな！」
「すまない、ランディ‼」
ティオが再び魔法の魔方陣を浮かびあがらせる。
「エニグマ、駆動……みなさん、お願いします！」
「まかせて！」
「おっしゃぁッ‼　とっとと終わらせるぜ！」
「よし、一気に行くぞ！」
ランディたちの加勢を得て、ロイドとティオは魔獣を撃退することに成功した。

魔獣が現れた原因は、柵の取りつけ不良だった。
弱っていたところがあって、壊されて入ってこられてしまったらしい。
ミシュラムの保安責任者が何度も頭を下げて感謝してくれた。
それよりも、ティオには、みっしぃのお礼ひと言のほうがうれしかったようだが……
「本当にありがとうございました！　今から、すべてのフェンスを入念に点検しなおし、がっちり補強します‼」

責任者の人が固く約束してくれた。
ロイドはうなずいて返す。
「そうしてください。楽しい場所だからこそ、安全第一ですからね」

ＭＷＬを出た頃には、すっかり西日が差していた。
「いや～、だいぶ遅くなっちまったな～」
ランディがぼやく。
キーアが大きなあくびをして、エリィが気遣う。
「自分で歩ける？」
「へーき……むにゃ……んにゅ」
いつも通りの平和な特務支援課の風景だ。
ティオがジト目なこと以外。
「……それで？　どうしてミシュラムにいたのですか？」
「ギクッ」
ランディが目を逸らす。
そういえば、とロイドは小首をひねった。
「たしかに妙だな。ランディもエリィも非番じゃないはずなのに」

「あ、いや……今日のは支援要請だったんだ。そうだよな、お嬢？」
「えっ⁉　私に振られても……」
「エリィ～、もう隠れんぼしなくていいの～？」
「ちょっ、キーアちゃん⁉」
ティオの表情が曇っていく。
「……つまり、わたしとロイドさんを、つけてきたのですか？」
「えっ？　そうなのか？」
ぶんぶん、とランディが首を横に振った。
「ち、違うって！　偶然！　お、俺は……そう！　お嬢とデートしてたんだよ！」
「ええっ⁉　じょ、冗談じゃないわよ！　そんなこと絶対にしません！」
「お嬢、ここは話を合わせるとこだろ⁉」
「そんなこと言われても……だ、だめよ、そんなの」
頬を染めてエリィがうつむく。
ティオが口をへの字にした。
「エニグマ、駆動……」
ぶおん、と魔方陣が広がっていく。
「えっ、ティオ⁉」

慌ててロイドは止めに入るけれども、気づくのが遅れた。
耳まで真っ赤にしたティオが、ランディへと手を突き出して――魔法を発動する。
「お仕置きです！　アイスハンマー‼」
「うひゃ～～～～～～～～～～～～～⁉」
夕焼けに染まるミシュラムの桟橋に、騒がしい悲鳴が響きわたるのだった。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで ▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、(falmaga@field-y.co.jp) まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.135プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『那由多の軌跡』で印象に残っている曲は？
　アンケート②『黎の軌跡Ⅱ』に新たに登場して欲しいキャラクターは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：英雄伝説 黎の軌跡Ⅱ -CRIMSON SiN- 最新情報
2：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
3：創の軌跡　THE MISERABLE SINNERS
4：ファルコムニュース
5：那由多の軌跡 アド・アストラ
　オリジナルサウンドトラック　レビュー
6：暁の軌跡最新情報
7：英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

応募締め切り　5月26日（木）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.135

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/